

福岡城跡大手門

— 第48次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第772集

2003

福岡市教育委員会

福岡城跡大手門

—第48次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第772集

建造物（県指定）

ふくおかじょううちよおおて ちゃん
福岡城大手門 1棟

昭和31年4月3日指定

城内 福岡市



旧福岡城の門のうち、永年の風雪に耐え現在位置を保っているのは、この門のみである。

この門は旧福岡城下の橋側の城門であり、もとは二層の屋根になっていた。昭和28年の修理で一層に変形しているが、下層の巨材にお慶長の風格をしのぶことができる。

序 文

福岡市は、古代から大陸の門戸として発展を遂げており、多くの歴史的遺産を有しています。また、アジア、特に中国・朝鮮半島との対外交渉の接点として我が国の中でも大きな役割を担ってきました。

黒田長政が7年間を要して築城した福岡城は、博多湾に面して東西に鶴翼状の広がりを持つところから、別名「舞鶴城」と呼ばれています。昭和32年に国の史跡に指定され、現在では歴史公園としての環境整備が進められ、舞鶴公園として市民に親しまれています。

福岡市教育委員会では、これまで公園整備に伴い、福岡城跡の発掘調査を進めてまいりましたが、今回の調査は、福岡県の有形文化財（建造物）指定の下の橋大手門（渦見門）が、平成12年8月5日に不審火によって焼損したことから実施することになったものです。発掘調査は、下の橋大手門を江戸時代の姿に復元するため規模や構造等の内容把握を目的に行いましたが、上の橋大手門も併せて発掘調査を行った結果、両者が石垣間口、門の桁、梁規模、礎石の位置などが一致するなど、二つの大手門が相似形であることが判明し、復元に向けて大きな手掛かりをつかみました。本書は、その調査成果について報告するものです。

本書が、市民をはじめ多くの方々の文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例 言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成13年度に実施した発掘調査報告書である。
- (2) 本書には、福岡城跡第48次調査（上の橋・下の橋大手門跡）の成果について収録するものである。
- (3) 発掘調査は、福岡市教育委員会文化財整備課所属の井澤洋一・榎本義嗣が担当した。
- (4) 本書に掲載した上の橋大手門跡、下の橋大手門（南側石垣大端、トレンチ5）の遺構平面図（縮尺1/20）の実測については、「株式会社埋蔵文化財サポートシステム」に委託した。その他の遺構平面図及び、断面図・土層実測図等の作成等は、井澤、榎本、田中昭子、上野道郎が行った。合成図等の作成は、藤崎真歩、田中が行った。
- (5) 本書に掲載した遺物（瓦類等）の実測は、田中が行った。
- (6) 遺構の製図は、藤崎・井澤が担当し、主たるは藤崎が行った。
- (7) 遺構の写真撮影は、井澤・榎本が担当し、遺物（瓦類）の撮影については、「有限会社フォトハウスOKA」に委託した。
- (8) 本書作成にあたっては、江口しげの協力を得た。
- (9) 遺構番号は発掘調査中において検出した順に通し番号をあり、整理報告の段階において遺構略号を遺構番号の頭に付けた。遺構略号として用いたのは、SB門、SX石組暗渠・集石・石組側溝などである。
- (10) 本書に用いた「御城廻御着請御絵図」等の城絵図は福岡市博物館に提供をいただいた。
- (11) 遺物の内、瓦師名や記念銘については、福岡市博物館の又野誠氏のご指導をいただいた。
- (12) 本書に用いた方位は、磁北である。
- (13) 本報告にかかる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する予定である。
- (14) 本書の纏集は井澤・藤崎が行い、執筆は井澤が担当したが、第1章(3)の文章は榎本の文章に井澤が加筆した。

発掘調査面積　　上の橋大手門跡　256.14m²

下の橋大手門　263.42m²

遺跡調査番号	0129	遺跡略号	FUE-48
地番	福岡市中央区域内	分布地図記号	舞鶴60
調査対象面積	519.56m ²	調査面積	519.56m ²
調査期間	平成13年10月2日～平成14年4月30日		

本文目次

	頁
第1章はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査の組織	1
(1) 平成13年度の発掘調査組織	1
(2) 平成14年度の資料整理組織	1
3. 福岡城の歴史	5
第2章上の橋大手門跡調査	9
1. 調査経過	9
(1) 上層	13
(2) 遺構	14
2. 第1面の調査	14
(1) 大手門跡	14
(2) 石組側溝	20
3. 第2面の調査	21
(1) 大手門跡	21
(2) 石組暗渠	24
(3) 石組側溝	27
4. トレンチの調査	28
第3章下の橋大手門調査	31
1. 大手門調査と経過	31
2. 第1面の調査	35
(1) 地覆石	35
(2) 敷石遺構	38
(3) 石組側溝	39
(4) 現代の搅乱等	39
3. 第2面の調査	42
(1) 大手門	42
(2) 不明遺構	42
(3) 集石遺構	42
(4) 石組暗渠	46
(5) 地覆石	46
(6) 瓦敷遺構	49
(7) 桟形門内の旧地表面	49
4. トレンチの調査	49
5. 大手門北側石垣天端の調査	55
6. 大手門南側石垣天端の調査	58
7. 出土遺物	61
第4章まとめ	66

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図（縮尺1/50,000）	2
Fig. 2	調査区位置図（縮尺1/10,000）	3
Fig. 3	上の橋大手門跡周辺地形図、及び調査区配置図（縮尺1/300）	10
Fig. 4	上の橋大手門跡土層実測図（縮尺1/60）	11
Fig. 5	上の橋大手門跡遺構配置図（縮尺1/120）	15
Fig. 6	旧陸軍時代の門跡 SX105実測図（縮尺1/60）	16
Fig. 7	石組側溝 SX101・暗渠 SX102実測図（縮尺1/60）	17
Fig. 8	石組側溝 SX101断面実測図（縮尺1/40）	18
Fig. 9	石組側溝 SX103、及び暗渠部分実測図（縮尺1/40）	19
Fig. 10	大手門跡礎石配置図（縮尺1/100）	21
Fig. 11	礎石断面実測図（縮尺1/40）	22
Fig. 12	トレンチ11土層実測図（縮尺1/40）	24
Fig. 13	近世石組暗渠実測図（縮尺1/50）	25
Fig. 14	トレンチ1 平面・断面・土層実測図（縮尺1/60）	27
Fig. 15	暗渠施設配置状況図（縮尺1/200）	29
Fig. 16	下の橋大手門周辺地形図、及び調査区配置図（縮尺1/300）	32
Fig. 17	下の橋大手門石垣断面図（縮尺1/150）	33
Fig. 18	東壁・中央ベルト土層実測図（縮尺1/60）	36
Fig. 19	第1面平面・断面実測図（縮尺1/100）	37
Fig. 20	石組側溝 SX101実測図（縮尺1/40）	41
Fig. 21	第2面遺構配置図（縮尺1/100）	43
Fig. 22	大手門跡礎石配置図（縮尺1/100）	45
Fig. 23	石組側溝・暗渠実測図（縮尺1/100）	47
Fig. 24	地覆石 SX205東側瓦敷遺構、及びトレンチ4 西壁土層実測図（縮尺1/50）	48
Fig. 25	トレンチ4 北壁土層実測図（縮尺1/40）	49
Fig. 26	トレンチ1 東壁土層実測図（縮尺1/40）	50
Fig. 27	トレンチ2 平面・土層実測図（縮尺1/50）	52
Fig. 28	トレンチ5 平面・土層実測図（縮尺1/50）	54
Fig. 29	大手門北側石垣天端平面・東壁土層・瓦敷遺構 SX215実測図（縮尺1/60）	57
Fig. 30	大手門南側石垣天端平面・西壁土層実測図（縮尺1/60）	59
Fig. 31	上の橋大手門跡出土軒瓦（縮尺1/4）	61
Fig. 32	下の橋大手門出土軒平瓦（縮尺1/4）	62
Fig. 33	下の橋大手門出土軒瓦（縮尺1/4）	63
Fig. 34	大手門出土記念銘瓦・刻印瓦・文字瓦、及び石垣刻印拓影（縮尺1/4・1/3）	64
Fig. 35	上の橋・下の橋大手門の平面・断面規模比較図（縮尺1/250・1/150）	67
Fig. 36	下の橋大手門江戸時代地表面、及び遺構推定復元図（縮尺1/150・1/250）	68

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡城は、別名舞鶴城と称した平山城で、昭和32年8月29日に国史跡に指定された。指定面積は48.3haである。昭和23年には「舞鶴公園（総合公園）」として、都市計画決定（40.4ha）されており、供用面積は37.4haである。

福岡城跡の所有者は、財務省、法務省、福岡県、福岡市となっているが、その内の大部分を財務省が所有しており、財務省との間に無償借地して公園整備が進められている。

昭和31年4月3日に指定された福岡県指定有形文化財の福岡城大手門（渦見門）とは、下の橋大手門を指し、指定当時は既に一層の薬医門の形状を呈していたため二層門復元の根拠、一層門に建替えられた時期など課題が多い。指定理由は、「福岡城の遺構として」とのみ記されており、詳細は不明である。

平成12年8月15日夕方に不審火のため出火し、消防局発表では全焼した。舞鶴公園は夜間も開放されており、大手門は舞鶴公園の主要園路になっている。

平成12年度に緊急的に応急措置と焼損調査を行った結果、上部の小屋組み、大扉の1枚、脇扉は全焼していたが、下部の冠木及び、門脚などは表面が焦げたが、若しくは煤ける程度であり、再利用が可能との判断がでた。平成13年度には、部材再利用の可否を判断するために部材調査を実施した。

2. 発掘調査の組織

(1) 平成13年度の発掘調査組織

調査主体	福岡市教育委員会
調査担当	福岡市教育委員会文化財部文化財整備課
調査責任	文化財部文化財整備課長 上村忠明（現 森と緑のまちづくり協会総務課長）
発掘担当	文化財整備課整備係長 井澤洋一、係員 榎本義嗣
庶務担当	文化財整備課整備係 備後博幸
調査員	田中昭子、藤崎真歩
調査協力者	上野道郎、坂本久幸、平山栄一郎、峯不二男、吉田勝善、金子由利子、指山歌子、柴田勝子、永井ユリ子、西口キミ子、平井和子、堀川ヒロ子、門司弘子

(2) 平成14年度の資料整理組織

整理報告主体者	福岡市教育委員会
整理報告責任者	文化財部文化財整備課長 平原豪
整理報告担当	文化財整備課整備係長 井澤洋一
庶務担当	文化財整備課整備係 清田耕一、管理係 川村浩旭
調査員	田中昭子、藤崎真歩
資料整理	堀タケ子、辻ミチ子、江口しづの、宮川知子



Fig. 1 周辺遺跡分布図（縮尺1/50,000）

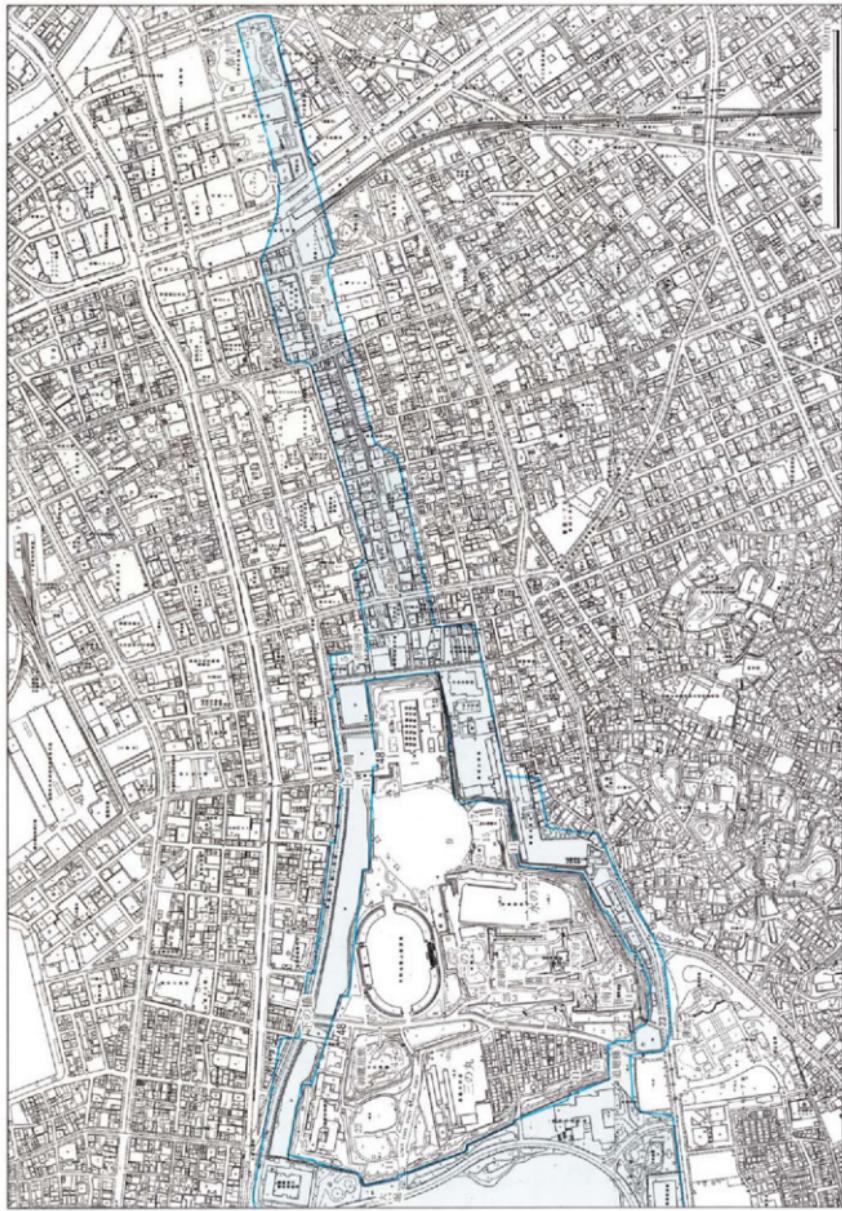


Fig. 2 調査区位置図 (縮尺1/10,000)

※数字は調査次数を表す。



福岡城の門（「御城廻御普請御伺図」明暦2年）

福岡城の門

種類	現存	郭	番号	名 称	別 称	形式	階数	備 考
門	○ 三の丸	①	上の橋御門	大手門・追手門		櫓門	二層	平成12年8月15日に火災で焼損。
		②	下の橋御門	大手門・渕見門		櫓門	二層	
		③	追廻御門	搦手門		平門		
	一 の 丸	④	水の手御門			平門		
		⑤	東御門			櫓門		
		⑥	扇坂御門			平門	二層	
		⑦	松木坂御門			櫓門	二層	
		⑧	桐木坂御門			櫓門	二層	
		⑨	埋門			平門		
	本 丸	⑩	表御門			櫓門	二層	大正7年(1918)に崇福寺山門として移築。
		⑪	裏御門			櫓門	二層	
		⑫	武具櫓御門			櫓門	二層	
		⑬	埋門			平門		
		⑭	鉄御門			平門		
	外 郭	⑮	赤坂門			櫓門	二層	
			薬院門			櫓門	二層	
			数馬門	春吉門		櫓門	二層	
			橋口(南北)門	桥形門		平門?		
			唐人町門	黒門		平門		

は古写真が残るもの

3. 福岡城の歴史

(1) 略歴

天正14年（1586）から始まった豊臣秀吉の九州征伐により、筑前国には小早川隆景が入国し、新たに名島城を築城する。また、秀吉は同時に朝鮮出兵の兵站基地として、黒田孝高（如水）、石田三成等に荒廃した博多を復興させ、太閤町割を行った。

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦い後、黒田長政は筑前領主小早川秀秋に代わって、筑前国15郡、五十万余戸（後には五十二万余戸）を与えられて入国した。長政は当初名島城に入城するが、城が小さく、城下町経営や博多支配に不便であることから、那珂郡堅固村福崎の地に新城を築くこととし、慶長6年（1601）にその築造に着手した。新城は、長政自らが設計し、野口佐助一成を普請奉行として、慶長12年（1607）まで7年を要して完成了。

城郭の形式は梯郭式の平山城で、城内は天守台、本丸、二の丸、三の丸の4層に分かれ、本丸には本丸御殿を、二の丸には御館、南丸を配する。三の丸の北側正面には家老級の侍屋敷がおかれ、下の橋大手門南側には、如水の隠居地である御鷹屋敷と、二代忠之と三代光之は、それぞれ三の丸に御館を構えるが、光之の御下屋敷は宝曆13年（1763）に焼失している。城内には潮見櫓、花見櫓はじめとする47の櫓が設置されていた。また、外郭は城の西側に大きく湧入する草ヶ江の入江を利用して大堀（大濠）とヤナ堀を設け、東側は那珂川を境として舟形門を設けた。内郭外堀から那珂川に通じるには、中堀、そして肥前鍋島氏の普請による肥前堀を開削している。

城内から外郭の城下町へ通じる橋は、大手側の堀に2ヶ所（上の橋・下の橋）、南西揚手には追廻橋があった。外郭の南側は赤坂山から伸びる丘陵を切断して堀を設け、北側は湯を埋め立てて城下町をつくった。城下町福岡の由来は、黒田氏の先祖の地である備前国邑久郡福岡に由来するもので、ここに中世以来の國際商業都市であった「博多」に加え、城下町「福岡」が誕生した。

また、豊前小倉藩との境に六端城には元和元年（1615）の一国一城令によって破却されるが、黒田二十騎と云われた播磨國以来の有力家臣を配置している。寛永9年（1632）、二代忠之が藩主の時に筆頭家老栗山大善との確執による御家騒動（黒出騒動）が発生する。

慶応3年（1867）、第15代將軍徳川喜喜は大政奉還を行い、明治政府が成立した。明治4年（1871）、政府は廃藩置県を実施し、旧筑前国は福岡県に、同9年（1876）には小倉県（旧豊前地域）が誕生するが、明治4午福岡藩賛賛事件により、福岡県知事黒田長知は罷免される。

新政府の政策は農民を圧迫するものであったため、各地で一揆が発生し、県内では明治6年（1873）に筑前竹槍一揆が起こった。県庁の所在した福岡城は襲撃を受け、これを契機に、小倉より第十四師団管内分営が分離され、ついで明治19年6月には、陸軍歩兵第二十四連隊が新設され、昭和20年の終戦まで軍隊の駐屯することとなった。

福岡城の規模

範 囲	面 積 (m ²)	備 考
国史跡指定地	482,496	内郭および北側堀他
内 郭 ①	約413,900	堀の内側のみ
内 郭 ②	約1,100,000	内郭および堀
内郭、裏、中堀および肥前堀	約1,210,000	
外 郭	約2,460,000	北側；博多湾、南側；中堀・肥前堀、東側；那珂川、西側；ヤナ堀
堀 え	約7,530,000	北側；博多湾、南側；赤坂山、東側；御笠川、西側；室見川（早良川）

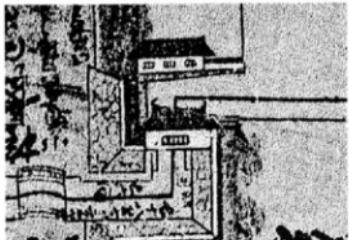
昭和21年に「舞鶴公園」として都市計画決定を受け、昭和32年（1957）8月に国史跡に指定、さらに、昭和57年10月には追加指定を受けた。

(2) 福岡城の略年表

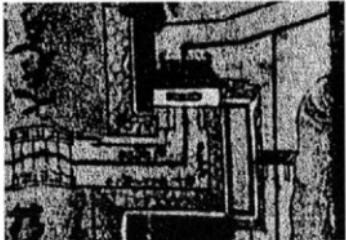
西暦	年号	内 容
1600年	慶長5年	関ヶ原の戦いで活躍した黒田長政が、徳川家康より筑前52万2416石を与えられて初代黒田藩主になる。
1601年	慶長6年	福岡城の築城がはじまる。
1602年	慶長7年	黒田長政が名島城から福岡城本丸にうつる。
1603年	慶長8年	豊前・筑後と筑前の国境に六姫城の築城をはじめる。
1607年	慶長12年	福岡城が完成する。
1615年	元和元年	幕府より藩主の居城以外に出城を持つことを禁止する「一国一城令」が出されたため、豊前・筑後と筑前国境の六端城を破却する。
1620年	元和6年	長政は幕府に対する忠誠を表すため天守閣をこわすように命じる。
1632年	寛永9年	この年の「黒田騒動」がおこり、領地を一度取り上げられるが、後にもどされる。
1646年	正保3年	幕府の命令で筑前国と福岡城・城下の地図を提出する。
1671年	寛文11年	三代藩主黒田光之が三ノ丸西北に藩主の御殿をうつす。
1699年	元禄12年	この頃、筑前・福岡城・福岡城下の実測による地図がつくられる。
1763年	宝曆13年	この頃、黒田光之が建てた御下屋敷が焼失する。再建された御下屋敷は焼失前に比べ、小さく質素なものであった。
1812年	文化9年	中堀と肥前堀を石垣に改築する。
1863年	文久3年	異国船に対する警備のため大砲を置く台場を福岡・博多の各所につくる。
1868年	明治元年	明治維新。
1871年	明治7年	7月2日、福岡藩知事黒田長知免官される。7月14日廢藩置県、福岡県庁を城内御下屋敷に置く。(廃城)
1873年	明治6年	6月20日、筑前竹槍一揆。樹形の石墨を乗り越え、内より鎮せる城門を開く。第14師団管内分営所となり、歩兵第11大隊の分遣隊が駐屯。
1876年	明治9年	県庁を城外に移転する。歩兵第14聯隊第3大隊の分遣隊が駐屯。
1886年	明治19年	6月歩兵第24聯隊が編成され城内に駐屯。
1887年	明治20年	那珂川西岸の樹形門以北の石垣及び西中島橋の樹形門を撤去。
1908年	明治41年	崇福寺、払い下げ許可になった花見櫓・汐見櫓2棟の引取に際し、敷石の下附願いを提出する。
1910年	明治43年	福津市内に電車が開通する。
1916年	大正5年	福岡市浜の町黒田家別邸竣工？
1917年	大正6年	花見櫓・汐見櫓・本丸表御門は崇福寺に、祈念櫓は大正寺に払い下げられる。
1919年	大正8年	武具櫓・本丸裏御門、陸軍省より浜の町の黒田家別邸に払い下げられる。
1945年	昭和20年	米占領軍、一時城内へ進駐。
1957年	昭和32年	福岡城、国史跡に指定される。
1982年	昭和57年	国史跡追加指定。
2000年	平成12年	8月15日、福岡県指定有形文化財福岡城大手門の下の橋大手門焼失する。

(3) 絵図にみる大手門の変遷

(上) 橋御門



(下) 橋御門



「福岡城図」

「正保城絵図」をさかのばる可能性も
考えられる

「正保城絵図 (福博物館図)」

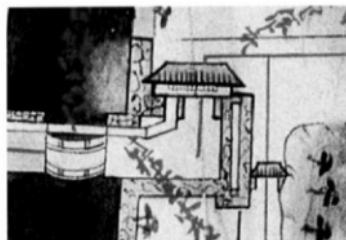
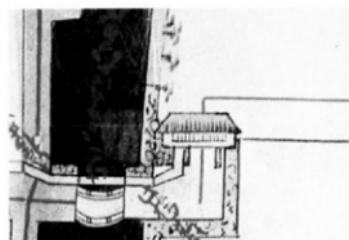
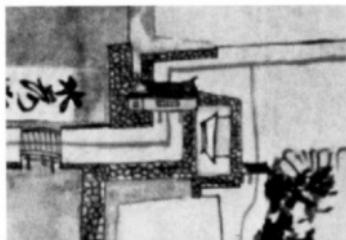
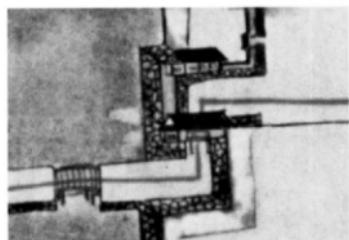
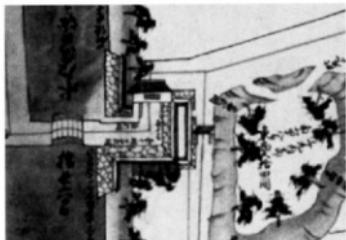
正保三年(一六四六)
慶安四年(一六五一)以降

「福岡城下之繪図」

寛文四年(一六六四)以前
寛文四年(一六六四)・寛延二年(一六五〇)以前

「御城圖御舊譜御同繪図」

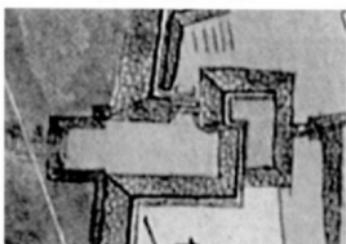
明暦二年(一六五六)



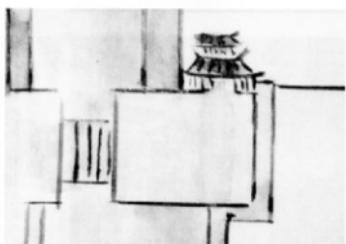
(上の橋大手門)



(下の橋大手門)



「福岡城絵図」
宝慶2年(一七五七年七月下旬)



「筑前福岡御城下図」
明治の写図(寛永年間の絵図が基図)



明治初年の上の橋大手門

第2章 上の橋大手門跡調査

1. 調査経過

上の橋大手門は、建物は遺存していないが、明治初めに撮られた写真が存在する。但し、この写真是北西方向から撮影されており、上の橋大手門の全形を正面からとらえたものではない。

前章でも述べた様に、上・下の両大手門は江戸時代の城絵図には相似形の建物として描かれており、発掘調査は規模・構造について下の橋大手門との類似性を確認することを目的とした。

調査範囲は、大手門跡を中心として約256.14m²の範囲を対象としたが、大手門の両側にある石垣上天端については、南側が大木があること、北側は所有者が法務省であることなどから、今回は調査対

象外とした。又、発見した石組暗渠の方向を確認するため、外軒形の橋脚台に近いところにトレンチ1を設定した。

調査前の現況ではあるが、舞鶴城公園の主要な園路となっているため、表面には細石が敷かれて平坦をなすが、方形に整形された礎石が南西側に存在する。この礎石は、直接的には福岡城跡に関係するものではない。



上の橋大手門跡発掘調査全景 (東から)

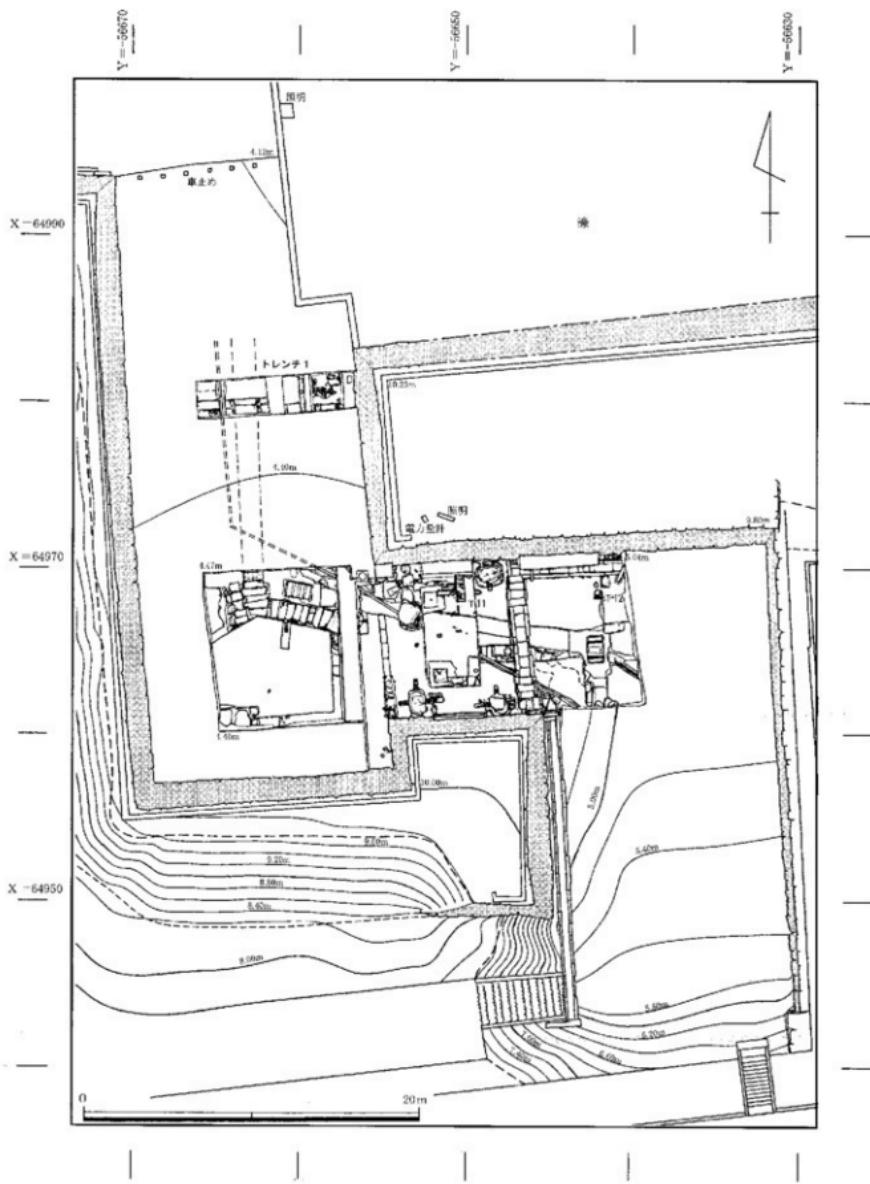
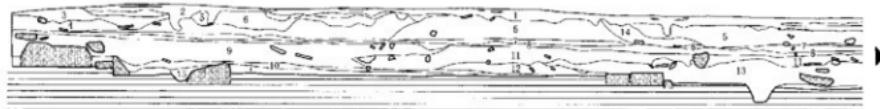
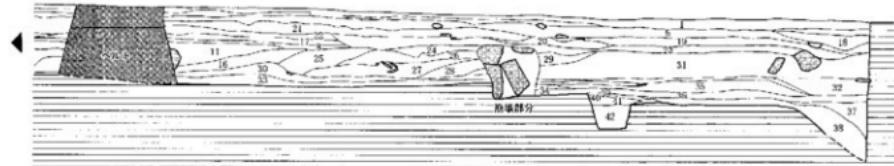


Fig. 3 上の橋大手門跡周辺地形図、及び調査区配置図（縮尺1/300）

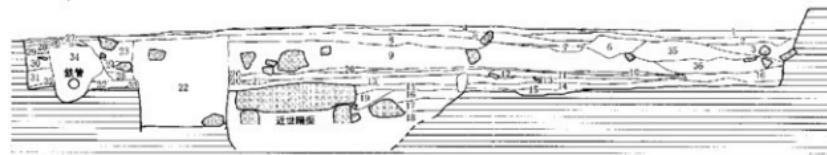


E L=5.00m W

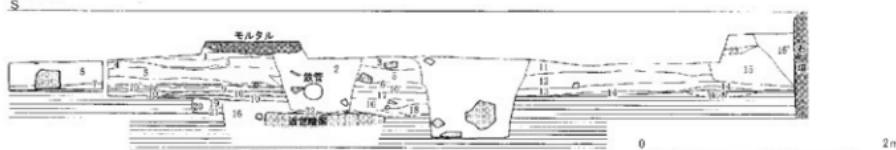


No.5 土層

L=5.00m S



No.3 土層



南壁土層名

1. 黒灰土上、鐵管含む
2. 黑灰色粘土、粗い砂
3. 塗墨色粘土、粗い砂、灰白色の鉄管入り、褐色土上を含む
4. 塗墨色粘土、灰土、鐵管、鐵色粘土を含む
5. 明褐色粘土、
6. 黃褐色粘土、レンガ、瓦片、灰白色の粗化した頁岩片含む
7. 黑褐色粘土、炭化物含む、頁岩片入りの頁岩土
8. 灰色粘土、泥土
9. 黑褐色粘土、石、瓦片、炭化物した頁岩片含む
10. 黑褐色粘土、頁岩、瓦片、頁岩土
11. 黑褐色粘土、瓦片、瓦、鐵管入り、炭化した頁岩片含む
12. 灰褐色土、瓦、瓦片、炭化物含む
13. 上記のない灰褐色土、大きなレンガ片、瓦、瓦片を多量に含む
14. 明褐色粘土、
15. 黃褐色粘土、瓦、瓦片、纏合む
16. 黃褐色粘土、瓦片、纏合む
17. 赤褐色土、
18. 黑褐色粘土、炭化物含む
19. 黑褐色粘土、頁岩土
20. 黑褐色粘土、頁岩土
21. 解体色粘土、瓦片、炭化物含む
22. 塗墨色粘土、瓦含む
23. 塗墨色粘土、瓦含む
24. 塗墨色粘土、炭化物含む
25. 塗墨色粘土、石合む
26. 漆黒色粘土、還化した頁岩片含む
27. 塗墨色粘土、瓦、炭化物含む
28. 黑褐色粘土、瓦含む
29. 黑褐色粘土、瓦含む
30. 黑褐色粘土、瓦含む
31. 塗墨色粘土、瓦、炭化物含む
32. 塗墨色粘土、
33. 塗墨色粘土、
34. 塗墨色粘土、
35. 塗墨色粘土、瓦、瓦片含む
36. 漆黒色粘土、

37. 黑褐色粘土、瓦含む
38. 黑褐色粘土、瓦含む
39. 黄褐色粘土
40. 非塑性地盤土
41. 褐色土
42. 線岩形
- No. 5 土層名
1. 非塑性土
2. 黑褐色土、黄白色頁岩ブロック混入、炭化物多い、油表面
3. 黑褐色土、頁岩多く混入
4. 黑褐色土、瓦片多く混入
5. 3とじ
6. 黑褐色土、瓦片多く混入
7. 黑褐色土、地土、瓦混入
8. 黑褐色土、マングニク層、炭化物混入
9. しまわりのない暗褐色土、石、瓦片混入、頁岩炭化ブロック混入
10. 黑褐色土
11. レトローブ 2~5cmの玉
12. 黑褐色粘土、炭化物
13. 黑褐色粘土、瓦混入
14. 黑褐色粘土、瓦混入
15. 塗墨色粘土、炭墨色混入
16. 塗墨色粘土、小磯、頁岩炭化ブロック混入
17. 15~5~10cmの膠泥土
18. 17~20cmの粘土ブロック含む、線岩形
19. やや弱い漆黒色粘土上に暗黃灰赤色粘土の互層
20. 10~15cmの粘土ブロック混入
21. 黑褐色土
22. 黑褐色土、頁岩土の混合土、頁岩炭化粘土多く含む
23. 黑褐色粘土、褐色シココック混入
24. 黑褐色粘土
25. 24. 黑褐色粘土との膠合土
26. 漆黒色土、頁岩土混入
27. 漆黒色土、チップ混入

28. 漆黒色粘土上、頁岩土混入
29. 26より幼い
30. 黑褐色粘土
31. 漆黒色粘土、高色土混入
32. 黑褐色粘土、しまりの無い灰表面
33. 漆黒色粘土
34. 黑褐色土と黄褐色土の混合土、鉄管の埋り方
35. しまわりのない暗褐色土、レンガ、瓦など多量に含む
36. しまわりのない暗褐色土、レンガ、瓦など多量に含む

No. 3 土層名

1. 黑褐色土、小磯を中心
2. 黑褐色土、黄褐色土、ブロック含む、抗張り力
3. 黑褐色土、混合土
4. 黑褐色土、瓦含む、やわらぎない
5. 黑褐色土、瓦含む、瓦、小磯を含む
6. 黑褐色土上
7. 順序がかった赤褐色土、レンガ片含む、並分段
7. 黑褐色粘土
9. 黑褐色土、やや硬質
10. 黑褐色粘土、炭化物多量に含む、旧土素
11. 開け土、油墨土
12. 黑褐色土、頁岩土、炭化物、黑褐色土ブロック含む
13. 黑褐色土、瓦、地土、炭化物、黑褐色土ブロック含む
14. 鉄管周囲土、灰褐色土上および赤褐色土上ブロック。
15. 黑褐色土、塗め土
15. 塗め土、小石、瓦含む
16. 黑褐色土、褐色土混入
17. 黑褐色土、頁岩土混入
18. 黑褐色土、頁岩土ブロック混入
19. 黑褐色土
20. 黑褐色粘土
21. 黑褐色粘土上
22. 黑褐色土、頁岩土含む
23. 黑褐色土
24. 黑褐色粘土
25. 黑褐色粘土
26. 漆黒色土、頁岩土混入
27. 漆黒色土、チップ混入

Fig. 4 上の橋大手門跡上層実測図 (縮尺1/60)

No1 南壁土層状態①（北から）



No1 南壁土層状態②（北から）



No2 土層状態（東から）



No3 土層状態（北東から）





No4
土層状態（東から）



No5
土層状態（北西から）

(1) 土 層

調査に先立って、公園整備のために整地した客土を約25cmの深さに重機によって除去した。

土層は、調査を南壁の東西方向の土層で観察すると、表土は厚さ12cmの細石層、第2層は灰白色砂層、第3層は粗砂層を含む暗茶色土層、第4・5・6層は瓦礫層で、特に第5層はレンガ片を多量に含んでいる。第4～6層は、戦後の盛土層で、第6層の下の第7・8層は、黒灰色砂質土及び、灰色砂質土である。旧表土と考えられる。この第7・8層は、南北方向のNo.4・5土層面においては南側に片寄って存在し、その上の第2・3層の赤褐色土、又は灰茶褐色土を蒲鉾状に盛土されている。この第2・3層は玉砂利を含んでおり、旧表土と考えられるが、南壁土層の第7・8層とNo.5土層面の第2・3層は表土として一体をなしていることが判明した。この表土が形成された時期は、門跡中央に第2・3層と同レベルに旧陸軍時代のコンクリート製門扉の基礎が残っていることから、下限を終戦までの時期としておきたい。これらの層の下層は、南方向、若しくは北方向に傾斜堆積したNo.5土層面の第6・20・35層など、瓦・レンガ片を含んでおり、一度に客土がなされた状態を示している。南壁土層面では、このレンガを含む層は、東、西方向に大きく広がっておらず、第13層が上に乗っているNo.5土層面の第9層黄灰褐色土は、内舟形南側石垣側溝よりづく暗渠の覆土となっている。南北方向の暗渠 SX102は江戸時代よりも下る時期で、限りなく、昭和に近い時期の所産と考えられる。

江戸時代の路盤は、全て客土によって形成されている。南壁土層の西側隅には大きな搅乱層が存在するが、地表面からの深さ約93cm、標高3.57mの位置において褐色砂が表出する。この砂層は北西方に向かって下がっており、築城当時の砂丘面と考えられる。

(2) 遺構

調査面積は 256.14m^2 で、内トレンチ1の面積は 21.7m^2 である。遺構面の擾乱が著しく、特に東側は瓦・レンガ片を中心とした残土捨場となっており、擾乱層も大きい。また、近年のことと考えられるが、直径150mmの鉄管（水道管？）やコンクリート製の暗渠が、略東西方向に敷設されている。水道管は第2面の江戸時代石組暗渠 SX201を貫通し、大手門鏡柱の礎石S2の下を通っている。この時パイプを通して、北側鏡柱礎石を掘り起こして浮かせている。暗渠はコンクリート製で幅約1.6mで、深さは約60cmであるが、江戸時代の暗渠に沿った状態でカギ形に敷設されている。掘り方の暗渠天井部までの深さは1m、標高は3.2～3.7mを測る。掘り方はバックホーで掘削されている。現代暗渠の東側には、幅35cm、長さ95cmの蓋3枚を重ねた開口部が、西側には高さ96cm、幅84cm、長さ150cmの堅括が設けられている。城内の雨水排水で、現在も機能していると考えられるが、所管が不明である。

以上の設備については、いずれも現状変更許可申請が出されていないため詳細が不明であるが、昭和40年代以降のことではないかと想定している。

上記の(1)土壘項で説明したとおり、遺構面は2面存在する。則ちコンクリート製の門柱が存在する昭和20年（終戦）までの面及び、江戸時代の面である。旧陸軍時代の遺構面は標高4.4mを測り、地表面は水平でなく、門中央より東寄りが高い蒲鉾状の面を形成している。第1～3層内には玉砂利を含んでおり、面の硬化も見られることから玉砂利敷であったことが伺える。

この面に伴う遺構としては、コンクリート門柱基礎や石製の扉止め、内折形石垣に伴う石組側溝SX101、SX103及び、これに接続する石組の暗渠SX102である。

第2面の江戸時代の遺構面は、外折形では標高4.1m、内折形では標高4.0mを測る。門の地覆石より外側（外折形）の表土は暗黄褐色粘質土で、径2～5cmの玉砂利を多く含んでいるが、本来表面が厚さ約10cmの玉砂利敷きであったことを示している。更に玉砂利層下位の遺構面確認のためにトレンチを設定した。玉砂利層の下層は、第13層暗灰黄色砂質土、第14層は灰黒色砂質土であるが、これらは水平堆積をした整地層で、石組暗渠を覆う層と考えられる。

地覆石より内側の門内の旧地表は、同じく暗黄褐色粘質土であるが、玉砂利が敷かれている。また、内折形の旧地表面は淡灰色砂質土、または黒灰色砂質土であるが、門内と同様に玉砂利は敷かれておらず、瓦片を敷設していることが確認できた。

遺構は、下の橋大手門と同規模の門礎石、門内をカギ形に貫流する石組暗渠、脇戸に直交する石組側溝である。

外折形の出口部分に東西方向に通路を横断する形で設定したトレンチ1では、石組暗渠及び、石敷きの路盤及び、明治以降の大型土壠を発見した。

2. 第1面の調査

明治時代から昭和20年（終戦）までに構築された遺構であるが、各々の遺構毎の時期は判別できない。

(1) 大手門跡

コンクリート製の門柱基礎と扉止めの石柱の組み合わせである。2本の鏡柱の基礎は径1.5m角、厚さ20cmの捨てコンの上に高さ30cm、長さ83cmの方形に築かれ、中央に鉄パイプを芯としている。南

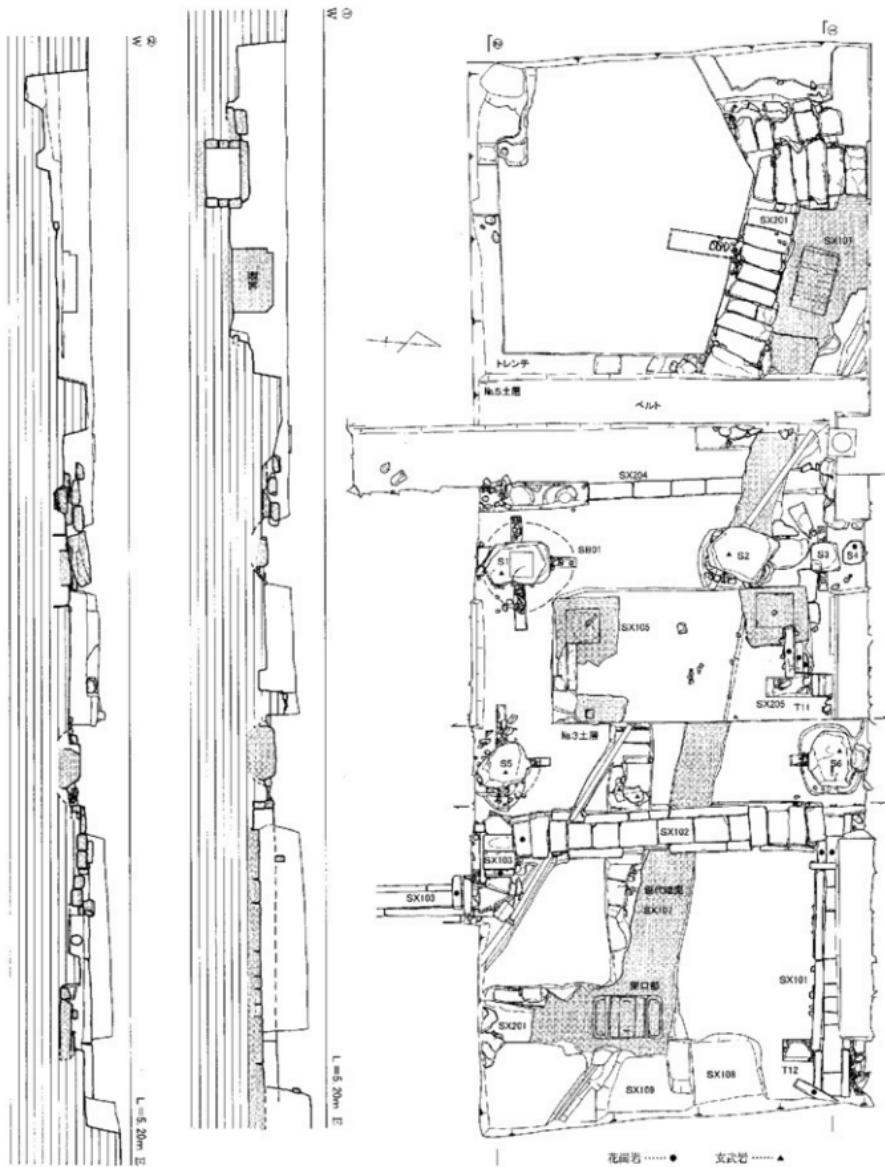


Fig. 5 上の橋大手門跡遺構配置図（縮尺1/120）

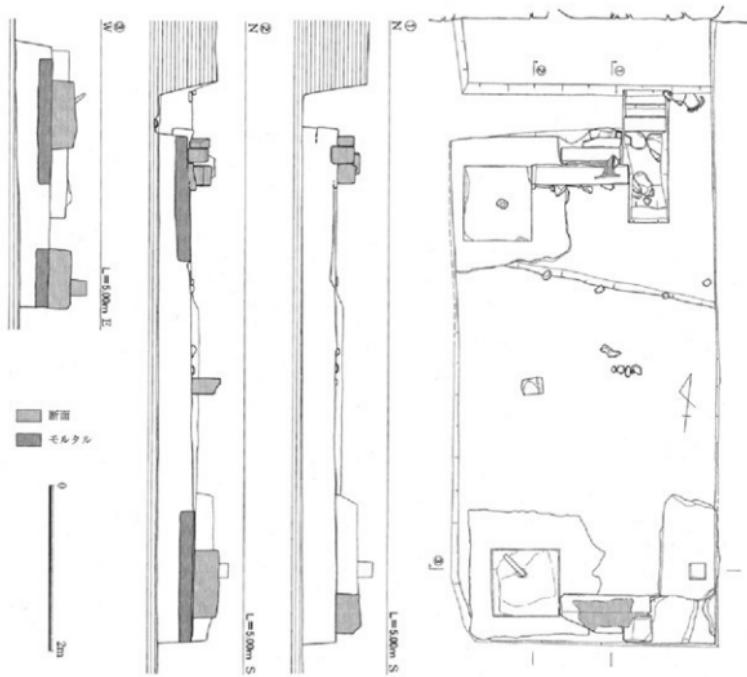
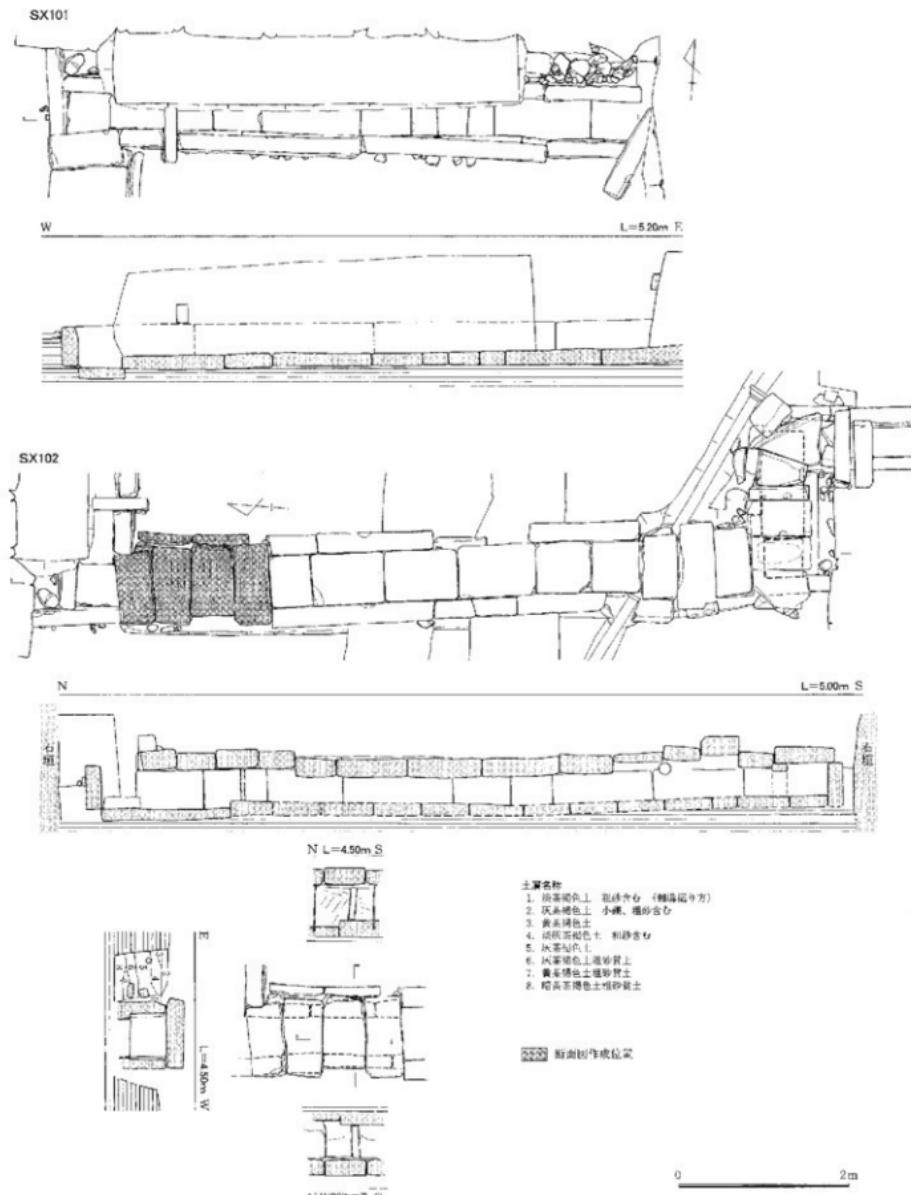


Fig. 6 旧陸軍時代の門跡 SX105実測図 (縮尺1/60)



旧陸軍時代の門跡（西から）



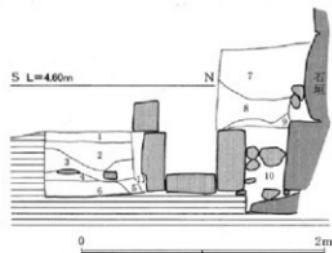


Fig. 8 石組側溝 SX101断面実測図 (縮尺1/40)



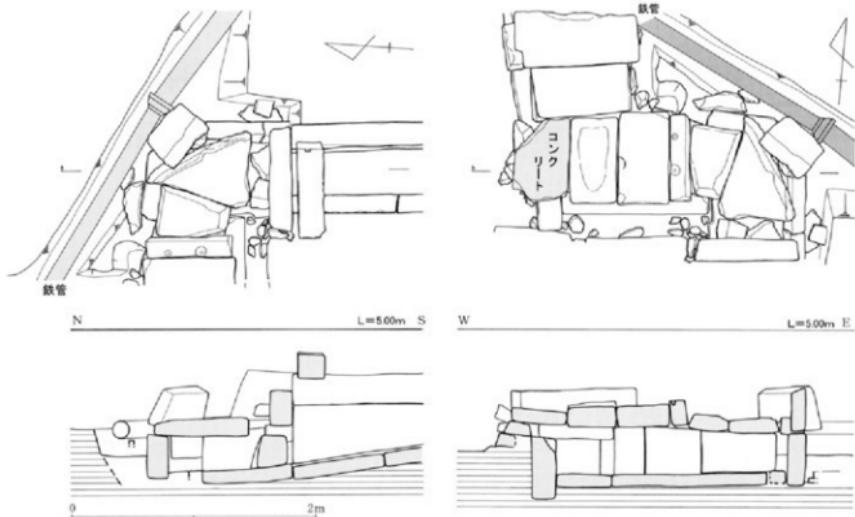


Fig. 9 石組側溝 SX103、及び暗渠部分実測図（縮尺1/40）



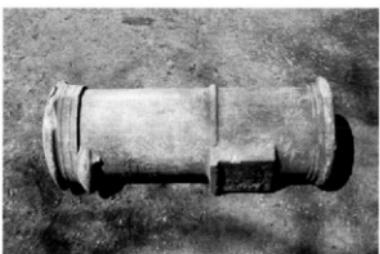
石組側溝 SX103暗渠部分（西から）



石組側溝 SX103暗渠部分（南から）



現代の暗渠堅坑（西から）



現代の郵便ボスト（南から）

側鏡柱の接えと考えられる土台は、東西0.7m以上、南北1.2m範囲にコンクリートが貼られている。コンクリート上台の厚さは、約26cmを測り、上部に高さ20cm、長さ20cmの方柱状の突起を造りだしている。方柱状の突起は扉止の機能をもつものと考えられる。鏡柱基礎と接柱基礎との間は、長さ1.2m、一辺23cm角の花崗岩の方柱石で連結している。

門扉正面の扉止めは、長さ26cm、高さ35cmで、頭部を加工した花崗岩の方柱石を直接地面に埋め込んでいる。

(2) 石組側溝

内枠形内には、南北・東西の石垣に沿って2条の石組側溝を構築している。

SX101 (Fig. 5・7) SX101は、北側石垣に沿って設けられており、確認した長さは約6.85m、東西方向から南北方向に矩形に曲がる石垣に沿って延伸するものと考えられる。幅85cm（内法45cm）、南側壁高75cm以上（内法60cm）を測る。底板には幅30~120cmの砂岩の板石を、側壁には長さ200cm大の砂岩板石を用いているが、側壁の板石には一側辺に段を付けた加工がみられる。転用材である。砂岩の板石は、いずれも規格性がなく不揃いである。

板石の厚さは砂岩が23cm、花崗岩が31cmを測る。北側壁上端と北側石垣との間は約35cmの隙間があるが、底石は石垣に密着していない。

側溝の掘り方は、江戸時代の面を掘り込んでいる。側壁は北側は1石、南側は2段2石であるが、南側側石の2段目は、南側より高い。また1段目石より厚く、またずれている。底石は側石の間に据えている。

側溝の西側先端は、南北方向の石組暗渠SX102に接続している。接続部分の底面は、側溝SX101の底石が暗渠SX102の底石上に乗っている。この部分の南側壁の一部に花崗岩を用いるが、後の補修であろう。暗渠SX102の蓋石は、石組側溝SX101の側石上端より15cm低い。また、接合部の蓋石を失した箇所にはコンクリート製の蓋を用いている。

SX102 (Fig. 5) 大手門控え柱の東側に位置し、南北方向の暗渠である。南側を鉄管が貫通しており、貫通部分の側石は砕かれている。上面の幅は107cm、現存の長さ8.3mを測る。

天蓋の架設の方法は、暗渠の中央部の約4.3mの範囲と東・西側では異なっている。中央部分は大蓋両端に幅18cmの角柱を添えているが、東・西側は側石上に板石を乗せたままの状態である。東・西側は蓋石に転用材を用いるため、長さも不揃いで景観は悪い。東・西側の天蓋は中央部分より後出の補修部分と考えられる。

この暗渠は、下層に位置する江戸時代の暗渠と接続しており、江戸時代暗渠の天井石を抜いて城内雨水を排水しているものと考えられる。石材は砂岩を主体とするが、南側天蓋に補修の花崗岩がある。

SX103 (Fig. 5・7) SX103は、大手門南側石垣の南壁下に沿って設けられており、最大延長は18.5mを測る。側溝幅は75cm（内法40cm）、深さは内法50cmを測る。石材は砂岩を用いている。長さ50~185cmを測る。厚さは15~17cmである。

東壁側に長さ185cmの板石を用いている。門内は石垣に沿ってカギ形に屈曲するが、この部分は暗渠化しており、南北方向の暗渠SX102に接続する。開渠部分の北端天井には18・20cm角の花崗岩の柱材2本を架け渡している。

暗渠部分の長さは1.5mを測り、側石は砂岩を用いるが、暗渠内部の規模は不明。転用材を用いている。天蓋西側1石は、コンクリート製の蓋石である。

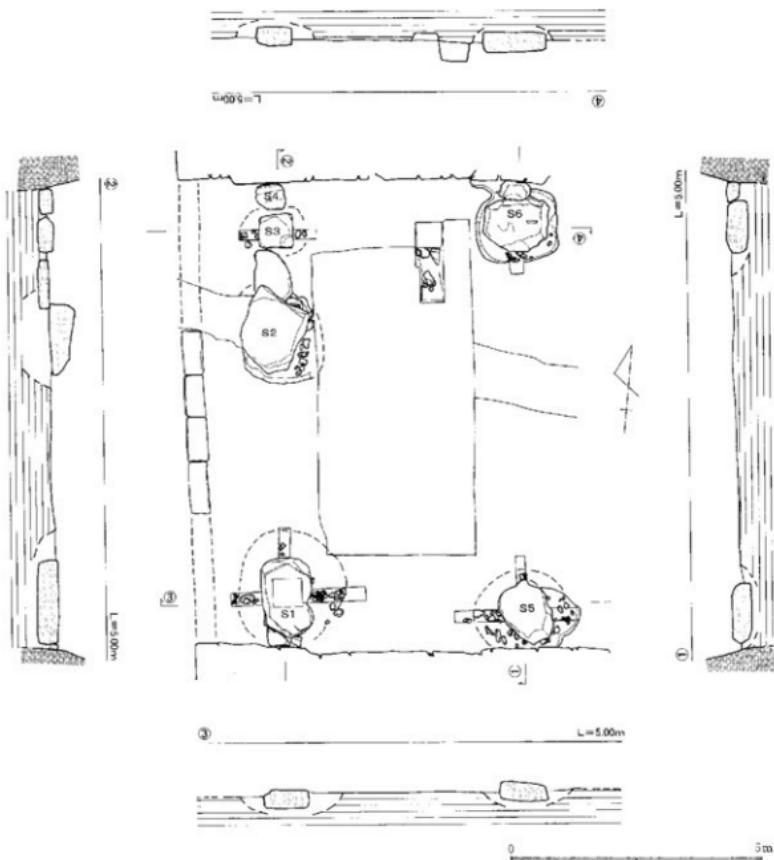


Fig.10 大手門跡礎石配図 (縮尺1/100)

3. 第2面の調査

江戸時代の造構面の標高は、地盤石西側で3.9m、門跡南側では4.1mを測る。門跡を除いては旧地表面に土砂利を敷いている。

(1) 大手門跡

SB01 (Fig.10) 北側鏡柱の礎石は、水道管敷設と現代暗渠の設置に際して動かされており、現状では礎石の下に人頭大の石を支えとして安置している。礎石は西側に鏡柱の2石、北脇柱礎石、寄掛柱礎石及び、東側に控柱礎石2石と寄掛柱礎石が存在する。鏡柱・控柱礎石は、いずれも玄武岩の扁平な自然石を用いている。脇戸の下には砂岩の扁平な框石を据えている。また、北側控柱礎石は、上部を削られており、東側から柱固定のためと考えられる幅5cm

S 1
E

L=450m W



トレンチ3土層名称
1. 黄褐色粘質土

- トレンチ1土層名称
1. 細粒灰褐色粘土
2. 黄色土
3. 棕褐色粘質土
4. 黄褐色土
5. 棕褐色粘土
6. 灰褐色粘質土
7. 黄白色粘土 黄色頁岩ブロック含む

S 1
S

L=450m N



トレンチ2土層名称
1. 黄褐色粘質土と赤褐色粘質土の混合土
2. 明赤灰色粘土

S 3
W

L=450m E

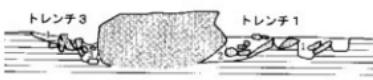


トレンチ1土層名称
1. 赤灰褐色粘質土
2. 灰色粘土

トレンチ2土層名称
1. 暗灰褐色粘質土
2. 灰色粘土

S 5
E

L=450m W



トレンチ3土層名称
1. 暗褐色粘質土
2. 褐褐色粘質土
3. 明赤灰色粘質土

- トレンチ1土層名称
1. 淡色粘土
2. 褐灰色粘質土 砂質土含む

S 5
S

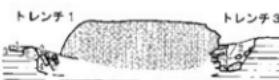
L=450m N



トレンチ2土層名称
1. 黄褐色粘土
2. 暗赤灰色粘質土

S 6
W

L=450m E



トレンチ2土層名称
1. 黑灰色土 黄色土含む
2. 褐褐色土
3. 黄褐色粘土
4. 黄色土 黄色土含む

- トレンチ3土層名称
1. 暗灰色粘質土 多く含む
2. 黄褐色粘質土 黄色化土含む
3. 黑色土と褐色土の混合土

S 6
N

L=450m S



トレンチ1土層名称
1. 暗灰色粘質土
2. 黄褐色土 黄色粘質土含む
3. 黄褐色粘質土 黄色ブロック含む

0 2m

Fig.11 儀石断面実測図 (縮尺1/40)



大手門跡 SB01 確石（東から）



礎石 S 1（北から）



礎石 S 2（北西から）



礎石 S 5（北から）



礎石 S 6（南西から）

の金具が埋め込まれている。南側鏡柱の礎石上には、方形の柱痕跡がある。この痕跡から、柱間をだとすると鏡柱間の長さは約7.2m、北鏡柱礎石と脇柱間は2.2m、南鏡柱礎石と控柱間は4.7m、脇柱礎石と控柱間は4.2m、控柱間の長さは7.7mを測る。

玄武岩礎石の大きさは、長さ115~174cm、幅95~111cm、厚さ34~41cmを測る。最大の礎石は北鏡柱で、長さ1.6m、幅1.0m、厚さ41cmを測る。これらの玄武岩は、鴻臚館跡発掘調査において、第Ⅱ期の礎石として発見されていることから、鴻臚館礎石を転用したものとして注目できる。

礎石の掘り方は、礎石の形状に合わせては長梢円形を呈しており、長さ2.1~1.6m、幅2.1~1.5m、深さ10~30cmを測る。人頭大から掌大の花崗岩割石が充填されている。

(2) 石組暗渠

SX201 (Fig.13-15) 内枠形から門跡中央部を通って外枠形に至るもので、暗渠の先端は北側濠に突き出した橋脚台下に開口しているものと推定できる。

暗渠は各々の枠形の中央部を通っており、内枠形から外枠形へはカギ形に曲がるため、門内はやや蛇行して進入する。門内は北鏡柱礎石の側を通過する。

暗渠は、表土下の約1.4mの深さに位置し、幅約1.2m、深さ1.1mを測る。外枠形の北側に設置したトレンチ1で発見した暗渠の一部を含めて確認出来た暗渠の最大の長さは約35.2mである。

側石、蓋石共に砂岩の板石を用い、蓋石には長さ約120cm、幅約45cm、厚さ約23cmの規格品を用いている。

西側の外枠形の屈曲部は、屈曲部の水流・量の調整のために長さ210cm、幅約240cmの溜枡を作っている。東側の内枠形内の屈曲部も同様であると考えられる。蓋石や側石には一部転用材、或いは規格外の材も見受けられることから、後世の補修があったことが伺える。

側石は2段で、底石の状態は不明。蓋石を側石にきちんと架設するために、蓋石裏面の側石に当たる部分を一段削っている。板材両面に斜め方向のノミ痕がみられる。

非常に不思議ではあるが、現代のコンクリート暗渠がこの江戸時代暗渠に沿って構築されている。江戸時代暗渠の位置が知られていたことを示すものであろうか？現在、当時の工事関係者を捜しているところである。

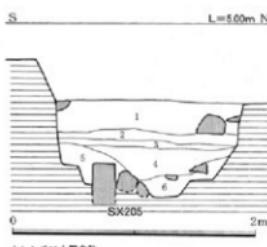


Fig.12 トレント11土層実測図（縮尺1/40）



トレント11内石組側溝状遺構（西から）

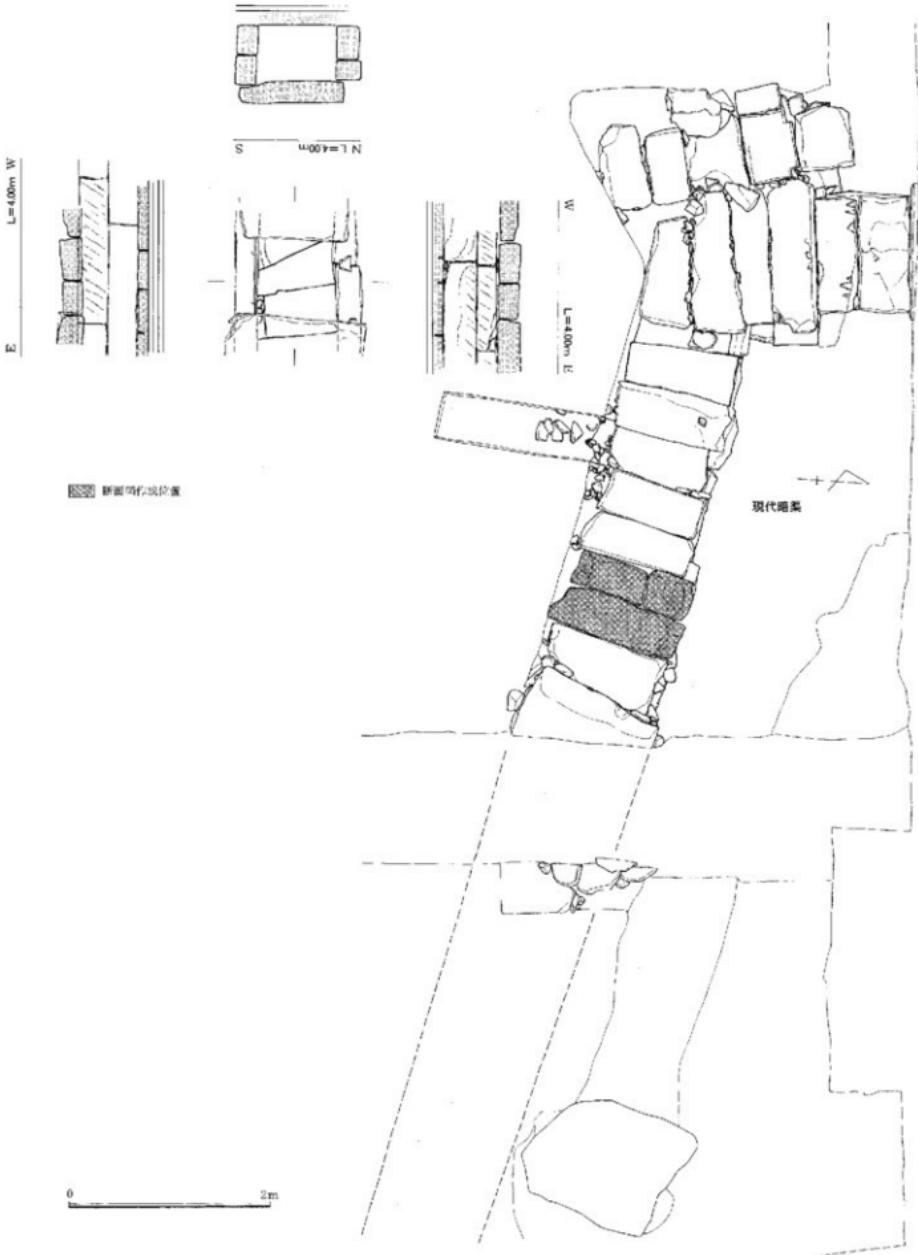
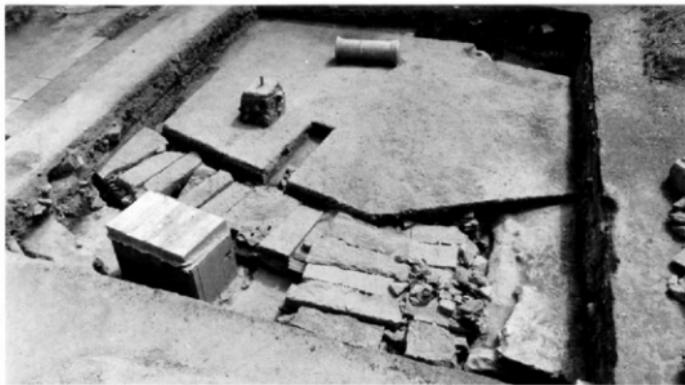


Fig.13 近世石組暗渠実測図（縮尺1/50）

暗渠 SX 201
①(北西から)



暗渠 SX 201
②(西から)



暗渠 SX 201
蓋石上瓦・礫出土状況
(南から)



(3) 石組側溝

SX205 (Fig.12) 門跡に設定したトレンチIIで確認した。江戸時代造構面の上面に現代の門跡が存在するため、充分な調査が出来なかつたが、側壁の一部を確認した。現代の地表面より深さ85cmで、江戸時代の旧地表面とのレベル差は約25cmである。砂岩の板石は、脇戸の方向に東西方向に立てて置かれ、下の橋大手門においても同様な造構を発見している。

板石は切石で、厚さ18cmを測る。深さは不明。門跡より先行する造構の可能性もある。

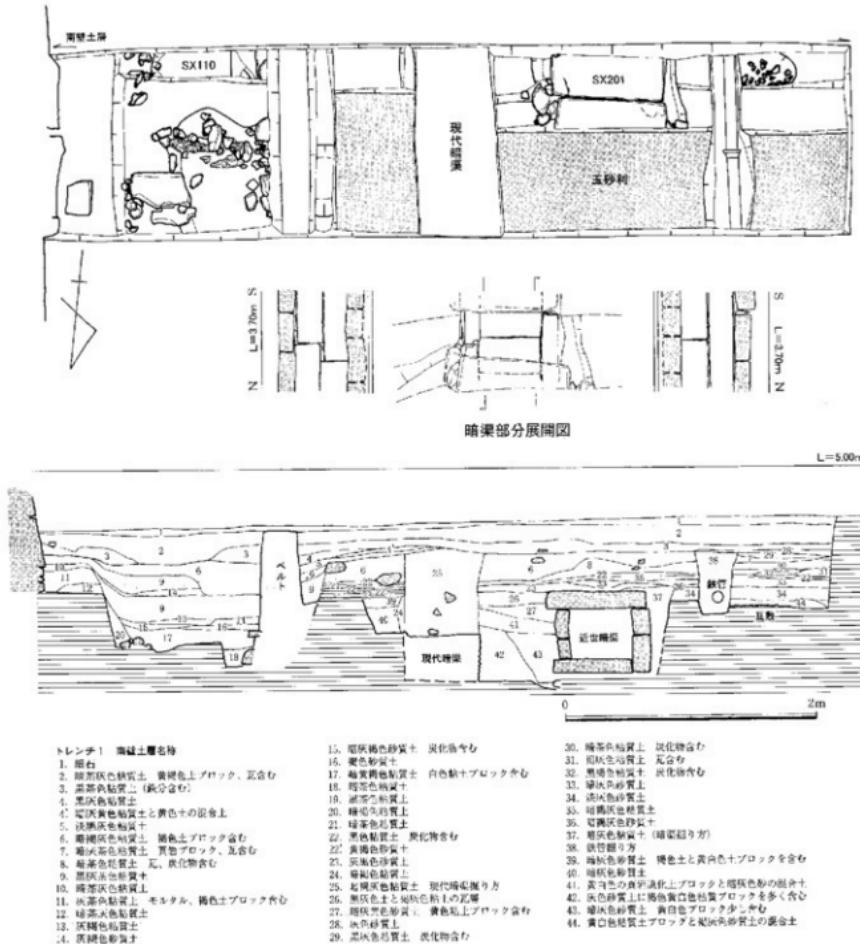


Fig.14 トレンチI 平面・断面・上層実測図(縮尺1/60)

4. トレンチの調査

上の橋御門外枡形に位置する。石組暗渠の方向と規模を確認するため、枡形を横断する形で東西南北にトレンチ1を設定した。

トレンチの規模は、南北2.3m、東西9.4mである。Fig.14の土層では、深さ42cmまでの第1～3層は現代の客土である。鉄管埋設及び、現代暗渠SX107は、第6層の暗灰褐色粘質土層から掘り込まれている。

SX110は、幅2.85m、深さ1.2mを測り、断面形はU字形を呈している。土層は下層に粘土の沈澱層や砂質土の堆積層も存在するので、雨水溜柵状の機能と考えられる。底面には、長さ35cmの長方形材や人頭大の礫が存在する。現代の掘り込みである。

江戸時代の地表面は、第22層の黒色土で、第35層の暗褐色土には玉砂利を含んでいる。



トレンチ1全景（西から）

石組暗渠 SX201は、第34層淡褐灰色土を掘り込んでいる。掘り方は逆梯形を呈するが、東側を現代暗渠で切られる。幅約2.0m以上、深さ約1.5mを呈する。暗渠は、掘り方の西壁に寄つて構築されている。高さ約100cm、最大幅124cm、側壁の高さは75cm、内法は幅76cm、高さ約60cmである。側壁東側は底石上に板石を2段に、西側は底石の外側に2段に組んでいる。蓋石は、長さ1.20m、幅50cm、厚さ20cm程度の板石を横方向に架け渡している。

天蓋石の裏面は、側石と接する部分を削っている。この暗渠は外枡形の中央に設けられており、暗渠SX201の溢柵から直線的につないでいる。

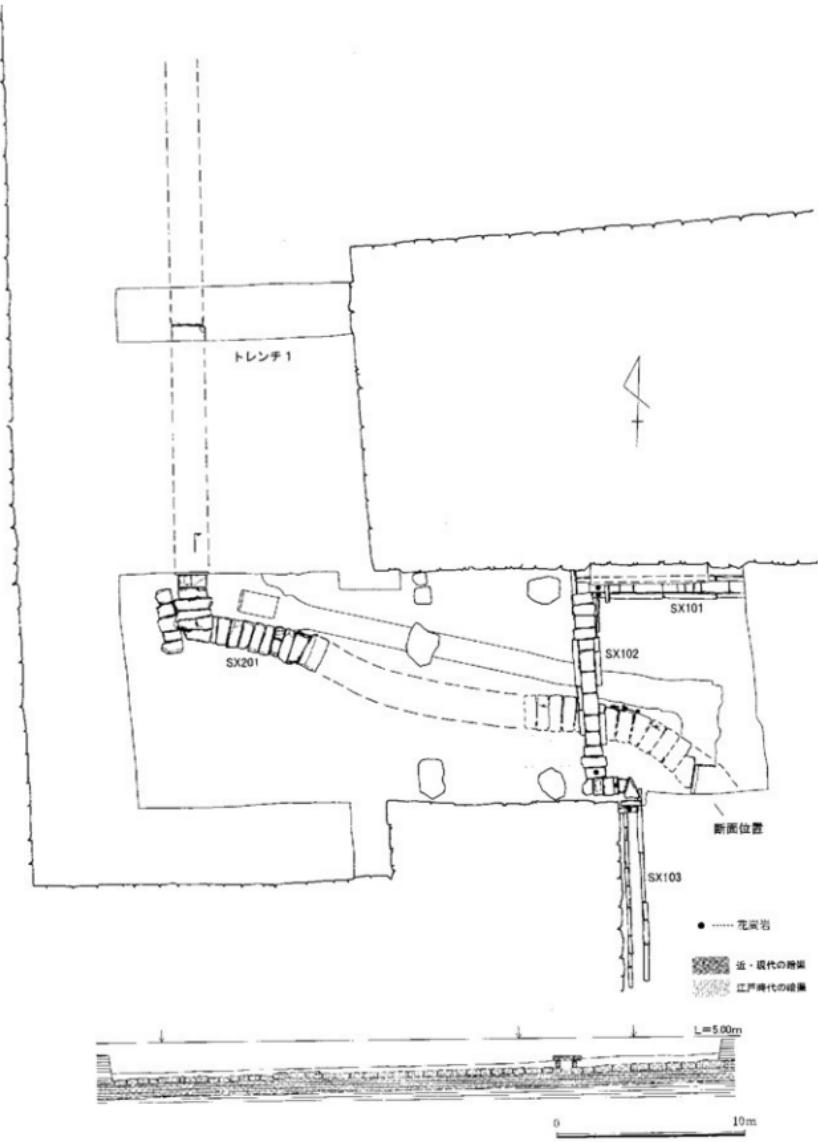


Fig.15 埋蔵施設配置状況図（縮尺1/200）

昭和9年撮影の下の橋大手門（正面）



昭和28年撮影の下の橋大手門（裏面）



平成12年焼損直後の下の橋大手門（裏面）



第3章 下の橋大手門調査

1. 大手門調査と経過

平成12年8月15日に不審火で出火した大手門は、消防署の見解では全焼であったが、平成13年度に行なった部材調査の結果、ほぼ全焼の小屋組・大扉の片面・脇戸扉を除いては、下部の門部材の焼損状況が予想よりも軽く再利用が可能との判断がでた。同時に小屋組の部材が江戸時代の材ではなく後の補修材であることも判明した。大手門の現存部材を最大限に用いて修理復元を行うに当たって、焼損前の状態に修復するのか、或いは江戸時代の二層櫓門に復元するのか論議の分かれるとこであった。

昭和32年に県有形文化財（建造物）に指定された福岡城大手門（漏見門）は、指定時には既に一層の平門（薬医門）であった。各種の城絵図には二層に描かれている大手門が、何時一層に改築されたのか、その時期と原因については明らかではない。明治6年の筑前竹槍一揆は、当時福岡城内の御下屋敷にあった福岡県庁に押し入っており、この後小倉より陸軍歩兵部隊が分駐し、明治19年に陸軍歩兵第24連隊が新設されている。大手門の所有者である福岡財務支局の管理台帳によれば「明治19年新設（推定）」と記されている。

県の有形文化財指定調査の理由書には、「福岡城の遺構として」とのみ記されているだけで、明確な指定理由もみられない。現状における大手門復元の位置づけは、「福岡城跡歴史的建造物ワーキング」の委員会において二層復元案を検討していただいた結果、冠木の位置や地棟木の存在など一層門として建築構造上不自然であること、地棟木の存在、柱や冠木の太さなどからむしろ二層櫓門の蓋然性が高いことが指摘されている。

また、7ページ城絵図によれば大手門南側の石垣は、①「福岡城内図」では、天端が狭く細長い石垣、②「福岡城下之絵図」では、石垣天端が南側に広く拡張し、平檣が置かれる。③「福岡城絵図」以降の絵図では、大手門南側石垣の北面に幅の狭い張り出しがみられるなど、南側石垣の大まかな時期変遷を追うことができる。

更に、櫓門の形式に注目してみると、「福岡城内図」などでは櫓部分を両側の石垣に渡しかけた状態で描かれているが、延宝7年（1757）頃の「福岡城絵図」などでは、両側の石垣内側に納まるよう門が描かれている。



下の橋大手門調査前の状況（北東から）

発掘調査では、城絵図に描かれた櫓門や石垣を参考として、櫓門形式・礎石の時期、石垣形状の変遷など、二層櫓門復元の根拠となる情報を得ることを主目的として行った。

大手門の現状は、応急処置として焼損した危険物の撤去と仮屋根の設置を行い、安全対策面から、外枠形・内枠形のそれぞれの開口部で道路を閉鎖している。大手門は文化財としての県指定を受けているだけではなく、「舞鶴公園」の主要な園路となっており、そのため、大手門周辺にはベンチや石垣に沿った花壇が設けられるなど常に整備されてきた。

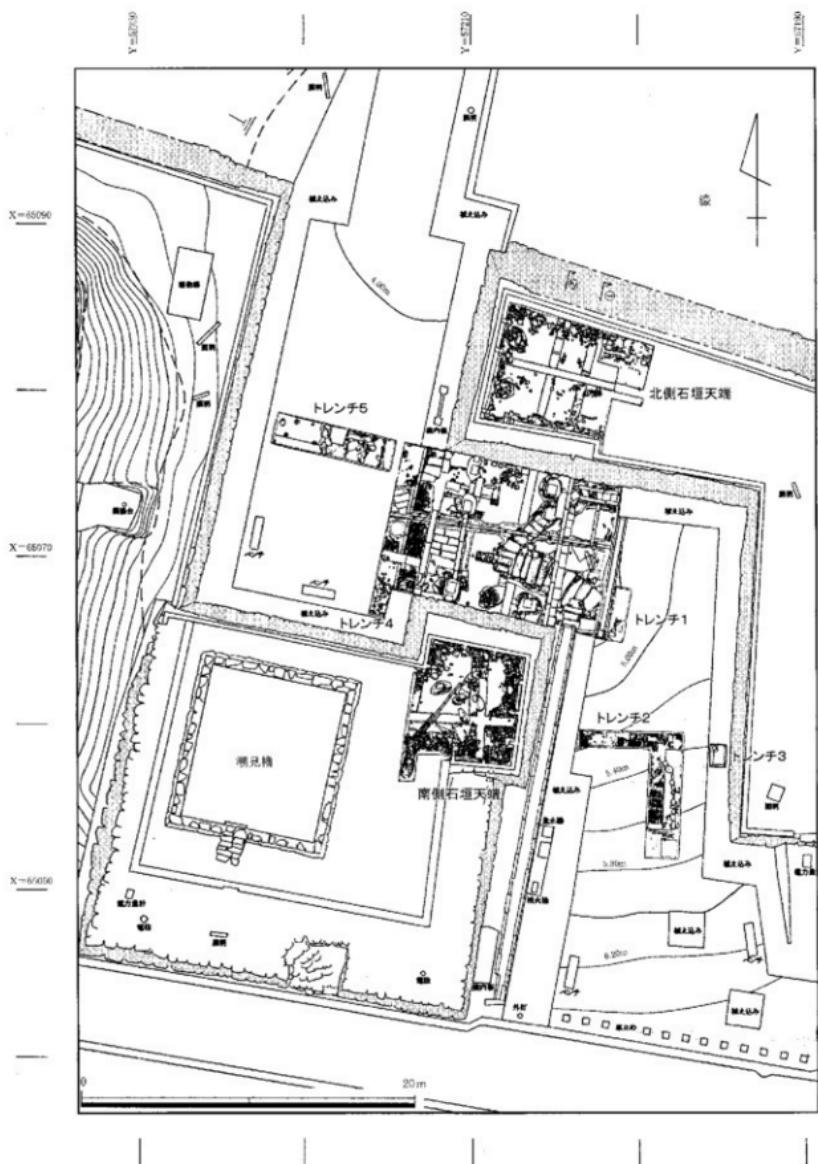
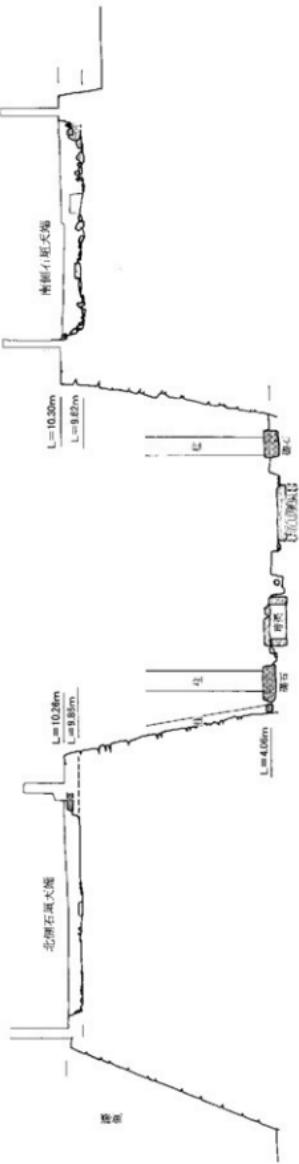


Fig. 16 下の喬大手門周辺地形図及び調査区配置図（縮尺1/300）

①下の橋大手門跡東側断面
N



②下の橋大手門跡中央断面
N



Fig.17 下の橋大手門石垣断面図 (縮尺1/150)

門周辺に客土等の整地が継続的に行われているが、現状変更の手続きが不明であることから事業の中身を知ることが出来ない。

大手門の遺構面は、2面を確認することができた。第1面は、明治時代から昭和31年までの遺構面、第2面は江戸時代の遺構面である。



下の橋大手門正面第1面全景（西から）



下の橋大手門裏面第1面全景（東から）

2. 第1面の調査

発掘調査の範囲は、大手門建物の軒下範囲を中心に調査区を設定した。絵図に描かれた内折形の階段状施設の確認など補足調査についてはトレンチを設けた。発掘調査前の路盤は細石層で、標高4.74mを測る。厚さ約12cmの細石敷設のため、礎石が全く見えない状態であった。細石層を撤去したところ、敷石とモルタルで形成された造構面を検出した。

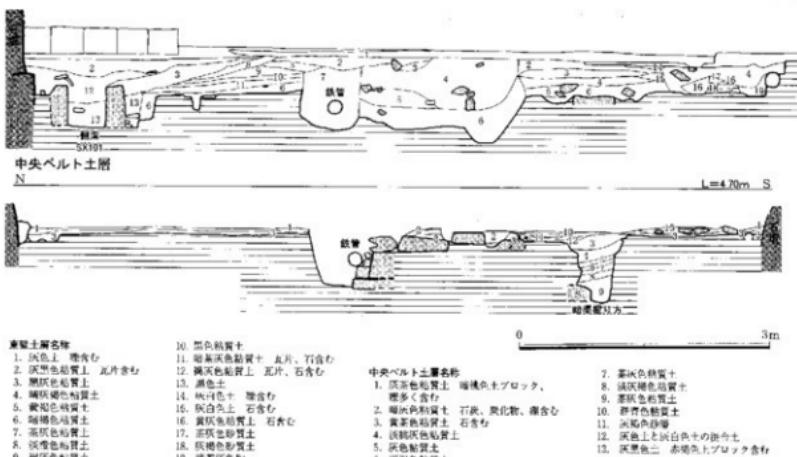
礎石は、鏡柱2個、脇柱1個、控柱2個の計5個所である。正門の左右寄掛り柱は、それぞれ鏡柱と脇柱の礎石を共有している。北東の控柱に沿った寄掛り柱は、長方形の角石を礎石としている。

脇戸に当たる部分には、長方形板石1枚が框石として埋め込まれている。地覆石は、SX111～115の5個所で、いずれも大略南北方向である。框石の機能と闕石の機能を持っていると考えられる。

(1) 地覆石

地覆石 SX111 (Fig.19) 地覆石は、花崗岩と砂岩の組み合わせで、闕石と考えられる。鏡石の前面約1.3mのところに南北方向に設置している。搅乱によって北側が抜かれており全てが遺存していない。砂岩と花崗岩の組み合わせであるが、高さや幅が一致しておらず、少なくとも3回の補修が考え





られる。砂岩①・⑤・⑥と、花崗岩③・④はそれぞれ規格が一致している。花崗岩は、長さ2m、幅35cmの方柱状材であるが、砂岩の①・⑤・⑥は、長さ約80cm以上、幅約48cm、厚さ18cmを測る。①は、地覆石SX112の砂岩①と規格が同一である。上面の標高は花崗岩が約4.05m、砂岩①が4.02m、砂岩②が4.15mである。砂岩①の高さは、花崗岩より4cm低い。⑤・⑥の砂岩は、転用材の可能性がある。本来は砂岩の地覆石で、花崗岩は地覆石SX112の花崗岩と同時期に付け替えられたものである。

地覆石 SX112 (Fig.19) 南北の鏡柱礎石間に繋いでおり、樁石と考えられる。砂岩と花崗岩の組み合わせであるが、高さや幅が一致しておらず、少なくとも2回の補修が考えられる。花崗岩①～③は規格が一致している。上面の標高は砂岩が約4.08m、花崗岩が約4.1mで、レベルは砂岩が高い。花崗岩は長さ1.85m、幅26cm、厚さ24cmの柱状石で、砂岩は長さ65cm、幅31cm、厚さ15cmを測る。砂岩・花崗岩材の下部の根締めにはモルタルが充填されている。

地覆石 SX113 (Fig.19) 大手門控柱から約40cm東側に位置し、樁石と考えられる。全て砂岩で、長さ88～130cm、幅20cm、厚さ25cmの柱状石を用いているが、石材の規格は統一されていない。上面の標高は約4.38mである。磨滅のため、表面の角がとれている。この地覆石の東側前面には、砂岩の雨落ち石が1列に敷かれている。この雨落ち石の上部に敷石SX105が位置する。

地覆石 SX114 (Fig.19) 地覆石SX113より約1.6m東側に位置し、樁石と考えられる。江戸時代と考えられる標高4.2mの旧地表面上に乗っている。上面の標高は4.4mを測る。全て花崗岩で、長さ1.1m、幅20cm、厚さ20cmの柱状石を用いている。

櫛乱構造 SX118に切られ、鉄管埋設構造はトンネルで地覆石の下を抜いている。南側は、石組側溝SX102の暗渠蓋石上に乗っている。北側は、石組側溝SX101に併せて、石材を切り詰めているが、加工は粗く、面取りはしていない。石組側溝SX102・石組側溝SX101に後出する。石材の側面には矢穴が残り、片側に径5cmの孔がある。転用材と考えられる。

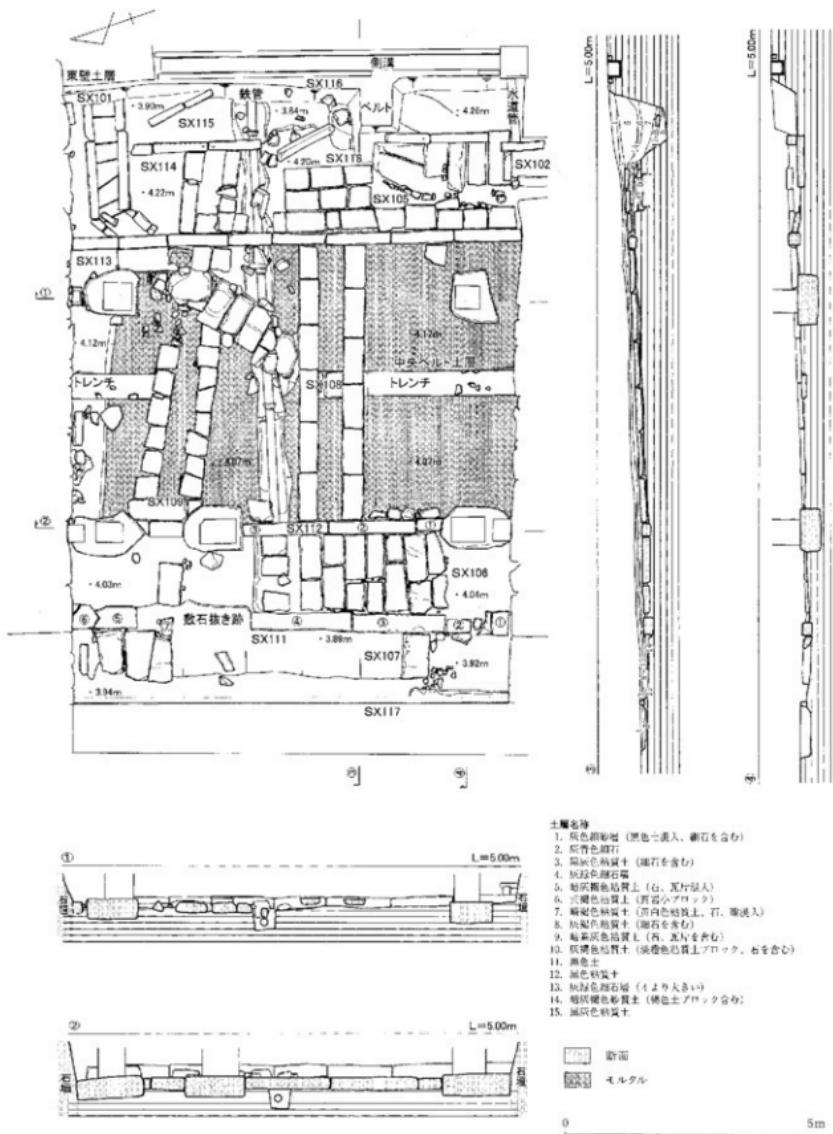


Fig.19 第1面平面・断面実測図 (縮尺1/100)

地覆石 SX115 (Fig.19) 長さ80cm、一辺15cmの花崗岩の方柱石を南北方向に並べたもので、上面は南側に上がっている。高さ4.5~4.65mを測る。

地覆石 SX116・117 (Fig.19) 地覆石 SX111の西側 (SX116) と、地覆石 SX114の東側 (SX117) に位置し、モルタル基礎に花崗岩の賽子石を並べている。公園整備事業の一環で、細石表土を掘削して敷設されている。西側の SX117は、江戸時代の地覆石 SX205の上面に乗っている。

(2) 敷石遺構

敷石 SX105 (Fig.19) 地覆石 SX113に伴うもので、雨落ち石と考えられる。砂岩板石を横長に南北方向に3列敷設するが、敷石 SX109・北側側溝 SX101・南側側溝 SX102暗渠部に切られ、遺存状態は悪い。現存の長さは1.9m、幅1.9mを測る。1列目は地覆石の東側に接するため、斜めに置いているが、他の2列は平坦に据えている。1列目の標高は、4.38m、2列目は4.42mを測る。板石の規格は統一されておらず、断面を残したものが多く、転用材と考えられる。長さ30~80cm、幅32~50cm、厚さ15cmを測る。

又、2・3列目の板石下部には小礫とモルタルが充填されている。

敷石 SX106 (Fig.19) 地覆石 SX01・02の間には、砂岩板石の敷石が、長さ約3.8mに亘って施される。上面の標高は4.1mを測る。板石の規格は、長さ50~70cm、幅は30~47cm、厚さ23cmの長方形材であるが、北側3石は鉄管埋設の埋戻しに際して半切し、敷き直している。南側2石も不整形の石材を用いており、後の追加である。脇戸の前面にも1石存在することから、本来は全面に敷いていた可能性がある。

敷石 SX107 (Fig.19) 地覆石 SX111の東側前面には、部分的に敷石がある。上面の標高は、3.9~4.1mを測る。砂岩の板石を用いており、南側は長さ約95cm、幅約40cm、厚さ23cmの長方形材を用いている。北側の3石は、長さ52~57cmで、不整形の石材を用いており、転用材と考えられる。敷石 SX106と同時期の敷設と考えられる。

敷石 SX108 (Fig.19) 地覆石 SX111と SX113の間に、東西方向に約48cmの間隔をとって2列に敷設する。鏡柱礎石間のやや北寄りに位置する。標高は4.1~4.35mを測る。長さ90cm、幅35cm、厚さ13cmの砂岩板石を並べており、敷石 SX106の列に方向を一致させている。敷石の下は、破碎礫とモルタルが充填されている。

敷石 SX109 (Fig.19) 脇戸から地覆石 SX114まで、東西方向に約45cmの間隔で、2列に敷設している。不整形の砂岩と花崗岩の板石を組み合わせている。標高は4.15~4.35mを測る。板石の規格は不揃いで、最大のものは長さ103cm、幅45cm、厚さ13cmを測り、長方形に切り出している。他は、長方形板石を半裁したものや、若しくは更に小さく割って使用しており、並べ方も整然としていない。地覆石 SX114に斜行するため石材の長さを調整している。また、脇戸の内側に長さ118cmの板石を据えているが同時期の敷設であるかは不明。

北側側溝 SX101の暗渠部分と切り合うが、敷石の一部が暗渠蓋石上部に乗っており、北側側溝より後出するものである。

大手門内には礎石、敷石 SX108・109、北側側溝 SX101の暗渠部分、鉄管掘り方部分を除いて、厚さ5cmのモルタルが全面に敷かれていた。モルタルの下は、厚さ8cmに花崗岩割石が敷き詰められて

おり、敷石 SX108・109の列石の下も同様である。但し、敷石 SX108と SX109の基盤の地山は、約3 cmのレベル差があるため、南側に位置する SX108敷石下の礫層は厚いが、北側の SX109敷石下の礫は少ない。

先述したように、敷石 SX108・109・105の基礎及び、地覆石 SX112・113の根縛めにもモルタルが使用されていることから、大手門内のモルタル整地と敷石の敷設、地覆石補修・改修が同時に行われたことが理解できる。

(3) 石組側溝

石組側溝 SX101 (Fig.19・20) 大手門北側石垣下に沿って設けられている。確認した長さは2.8mである。内枠形の北側石垣は、東西から南北方向に矩形に曲がっているが、南北方向の石垣面に沿って設置したトレンチ3では、石組側溝を検出していないので、東西方向のみに側溝が設けられたと考えられる。石材には花崗岩と砂岩の板石を用いている。花崗岩は、長さ1.55m、幅47cm、厚さ24cmの方柱状材であるが、砂岩は、長さ約1.55m、幅約50cm、厚さ20cmを測る。

側壁の幅60cm（内法45cm）、深さ65cm（内法49cm）を測る。北側壁は、砂岩板石を横長に一段、南側壁は花崗岩板石を横長に置き、板石の下には約15cm大の花崗岩、又は砂岩礫を咬ませ、側壁上端の高さを調整している。底石は全て砂岩で、長さ50cm、厚さ16cmの長方形板材を用いるが、約40°に折れる屈曲部に関しては、斜めにカットした材を用いている。

この側溝は、地覆石 SX113を境として門内は暗渠となり、江戸時代の暗渠 SX201に接続している。屈曲部からの長さは4.7mを測る。暗渠部分の側石・蓋石は、花崗岩・砂岩の切石、玄武岩の扁平自然石など転用材が用いられる。特に蓋石①～③は天井石が半裁され、しかも裏返しに配架されている。側壁の幅90cm（内法50cm）、深さ68cm（内法42cm）を測り、側壁は1段1石である。天井石のレベルは標高4.29mを測るため、敷石 SX109より天蓋が突き出る状態となる。

石組側溝 SX102 (Fig.19) 大手門南側石垣の南北面に沿って設けられており、最大長10.2m、幅98cm（内法60cm）、深さ63cm（内法63cm）を測る。石材は全て砂岩の板石で、側壁は砂岩板石を横長に立てて用いる。この石組側溝は、石垣の西南角から暗渠化し、江戸時代の暗渠に接続している。暗渠の長さ1.4m、幅75cm、底石は開渠部分から急激に傾斜している。深さは南側で62.5cm、北側は72.5cmを測る。側石は板石を4段に小口積みしている。蓋石には、長さ85～110cm、幅35～47cm、厚さ15cmの砂岩板石を用いるが、いずれも転用材である。蓋石③は、江戸時代暗渠 SX201の蓋石上に乗っている。

(4) 現代の搅乱等

鉄管 (Fig.19) 大手門のはば中央に東西方向に北側鏡柱礎石に沿って敷設されている。管径16cmを測る。地覆石 SX111・112・113・114の下をトンネル工法で貫通している。石組側溝 SX101と敷石 SX106を破壊している。現状変更の手続きが行われていないため、事業主体者、目的、時期が不明であるが、モルタル敷きの面をカットしていることや鉄錆の状態から、昭和40～50年代に推定できる。

外枠形に設けたトレント4においても延長部分を検出しているので、管が枠形内を矩形に設置されていることが推定できる。

搅乱層 (Fig.19) 調査区の東側に幅2.3m、深さ1mの大きな搅乱層が存在した。鉄管掘り方より先行する土壌で、覆土にはレンガ、瓦等を含んでいる。江戸時代の暗渠側壁を破損した後、補修を加えている。地覆石 SX114列石の一端の落ち込みが見られる。



下の橋大手門裏面第1面（東から）



石組側溝 SX101暗渠部の状態（東から）



石組暗渠 SX101・201（北西から）



石組暗渠 SX101（西から）



石組側溝 SX101側壁・底石の状態（北西から）



石組側溝 SX102暗渠部（北から）

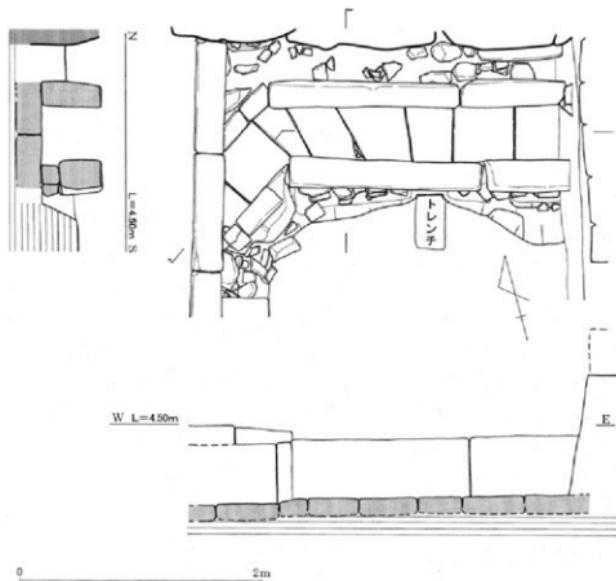


Fig. 20 石組側溝 SX101実測図（縮尺1/40）



石組側溝 SX101（南東から）

3. 第2面の調査

造構面は標高4.13mを測り、路盤の表土は暗茶灰色粘質土である。造構の詳細な確認のために更に約5cm掘り下げた面は、黄褐色粘質土に礫や第三紀の頁岩風化土を含み、非常に固く締まっている。江戸時代の大手門礎石5ヶ所、地覆石1条、暗渠1条、集石造構2、瓦敷造構などを検出した。

(1) 大手門

建物SB01 (Fig.21・22) 鏡柱礎石2、脇柱礎石1、控柱礎石2が存在する。正面両側の寄掛り柱は、南側鏡柱礎石と脇柱礎石を共有している。礎石は、いずれも花崗岩の切石を用い、一辺に矢の痕をもつている。不整梢円形、若しくは不整方形を呈し、長さ0.8~1.35m、幅0.35~1.0m、厚さは約40cmを測る。

北鏡柱礎石では、掘方径は1.75~1.95m、深さ約45cmを測り、12~25cmの大砂岩・花崗岩などの礫を根縛り石として充填している。

礎石間は、柱の中心で測ると礎石S1・2間は4.9m、S2と脇柱礎石S3との間は2.19m、鏡柱と控柱方向は4.65m、南控柱間は7.0mを測る。柱間の計測値はFig.35に示した通りである。また、集石造構との間隔は礎石S1~4間は2.31m等分、S3~5間は2.38m等分となる。

ちなみに、大手門石垣の正面（外枠形）幅は12.3m、裏（内枠形）幅は11.0mを測り、地覆石SX115から南側石垣西南角までの長さは20.5m、北側石垣の高さ6.02m、南側石垣の高さ6.08mを測る。

礎石5には、「十」の刻印が、礎石2には「〇」の刻印がある。但し、礎石2は、新たに削った面上に刻印をしており、時期は新しい。

(2) 不明造構

組石SX202 (Fig.21) 脇戸の内側に平行して立てられた2石を確認した。長さ65~74cm、幅約60cm、厚さ約18cmの砂岩である。底石はない。石組側溝の痕跡として確認のためトレンチを設定したが、東西方向への連続性は現段階では確認できていない。上の橋大手門跡でも同様な造構を発見している。

(3) 集石造構

大手門内の南北の鏡柱礎石と控柱礎石との間にそれぞれ一ヶ所の集石造構SX203・204を2ヶ所検出した。

集石SX203 (Fig.21・22) 北側脇柱礎石と控柱との間に位置する。掘り方規模は不明。平面形は梢円形状を呈し、最大径約1.3m、深さは不明である。集石の標高は約4.07mを測る。拳大から人頭大的礫である。集石の中央に長さ48cm、厚さ8cmの板石が乗っているが集石に伴うものではないと考えられる。

集石SX204 (Fig.21・22) 南鏡柱礎石と控柱との間に位置する。掘り方規模は不明。集石平面形は不整円形を呈し、規模は最大径1.3m、深さは不明。集石の標高は約4.08mを測る。拳大から人頭大的花崗岩の礫で充填されている。上面の標高は4.12mを測る。

柱芯で測ると、集石の中心から鏡柱と控柱までの長さは、それぞれ約2.3mを測り、1:1の等間隔である。

これらの集石と大手門との関係であるが、熊本城西大手門、松本城太鼓門、江戸城田安門などは、

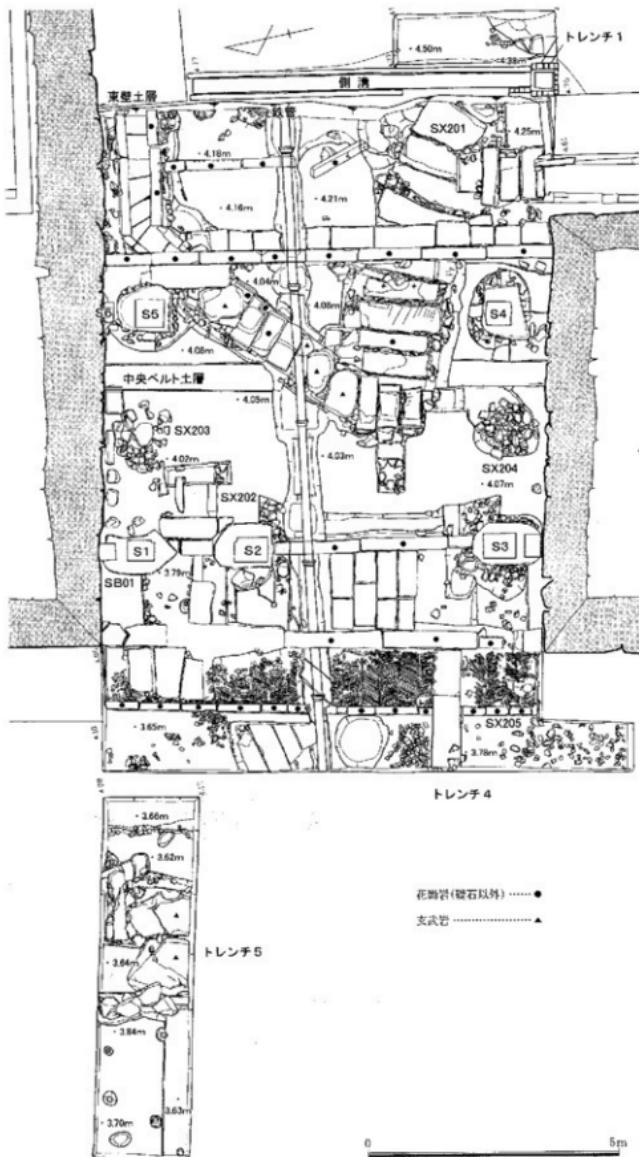


Fig. 21 第2面構造配置図 (縮尺1/100)



下の橋大手門正面第2面全景（西から）



下の橋大手門裏面第2面全景（南東から）



北鏡柱礎石根石状態（南から）



南控柱根巻モルタルの状態（北から）

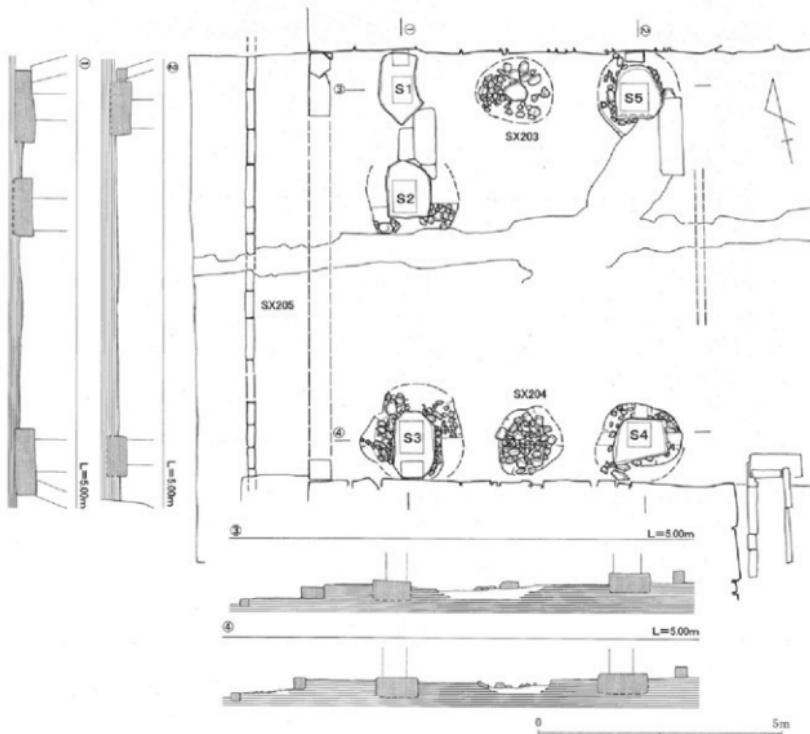


Fig. 22 大手門礎石配置図（縮尺1/100）



集石造構 SX203（南から）



集石造構 SX204（北から）

梁間が2間になっており、集石造構は改築に際しての礎石抜き跡と見做すことができる。

礎石の抜き跡、則ち根詰め石と考えるならば、江戸時代の最も新しい記録には文化2年（1806）以下の橋大手門の新規建替えの記述があることから現大手門より古い時期の文化年間以前の建物構造を示すものとして興味のあるところである。

(4) 石組暗渠

石組暗渠は、上の橋大手門跡の暗渠同様に内枠形、外枠形共に中軸線に沿って埋設されているものと考えられ、内枠形から外枠形への暗渠接続は直交させることができないため、各々に門の手前で溜柵を設け、門内鏡柱間の中央をやや蛇行させながら抜けている。

また、門裏側のトレンチ1で検出した暗渠蓋石の位置関係から、門内から内枠形への進路は緩いカーブを描いていることが推測できる。トレンチ4で検出した暗渠蓋石の一部から推測すると門内から外枠形の溜柵までは、暗渠を蛇行させていた可能性が高い。暗渠の結節点に溜柵を設けるなど、雨水を円滑に排水と流量調節できるように工夫されていたものと考えられる。また、蓋石には再利用の痕跡がみられ、修理・改修の多さを物語っている。

石組暗渠 SX201 (Fig.21・23) 門の中央部分を大略東西方向に設置されている。この石組暗渠は、地表面から約70cm下に天蓋石を発見したが、内部は未調査のため構造・規模等は不明である。掘り方断面形は逆梯形を呈し、深さ80cmを測る。蓋石の標高は、東側で4.21m、門中央で3.66mを測る。

暗渠石材は、砂岩を主体として一部花崗岩も見られる。砂岩板石は、長さ1.3~2.0m、幅35~85cm、厚さ約23cmを測り、裏面両端には側壁に架けるための深さ約16cmの削りがある。砂岩板石は規格化されているが、規格外の花崗岩板石①、砂岩板石②は後の補修材と考えられる。その他に③のように板石が裏返っているものや、④・⑤のように石組側溝 SX101の暗渠部分を接合するために板石を半裁するものがあるが、これらも後の修復・改修時の転用である。

礎石内の暗渠は、ほぼ直線的に設置されるが、これを中心として、南北の石垣までの距離は、5.9m、3.0mである。仮に南側石垣の幅3.1mの出っ張りがないものとすると、比率はほぼ1:1になる。

トレンチ5で検出した溜柵の規模は、未調査のため不明である。2枚の蓋石は一部を欠いているが、最大幅は1.2mを測る。2枚の蓋石は、いずれも玄武岩の扁平な自然石であるが、これも鴻臚館礎石の転用である。

(5) 地覆石

地覆石 SX205 (Fig.21・22) 地覆石 SX111前面の灰褐色砂質土を厚さ4cm除去したところ、地覆石

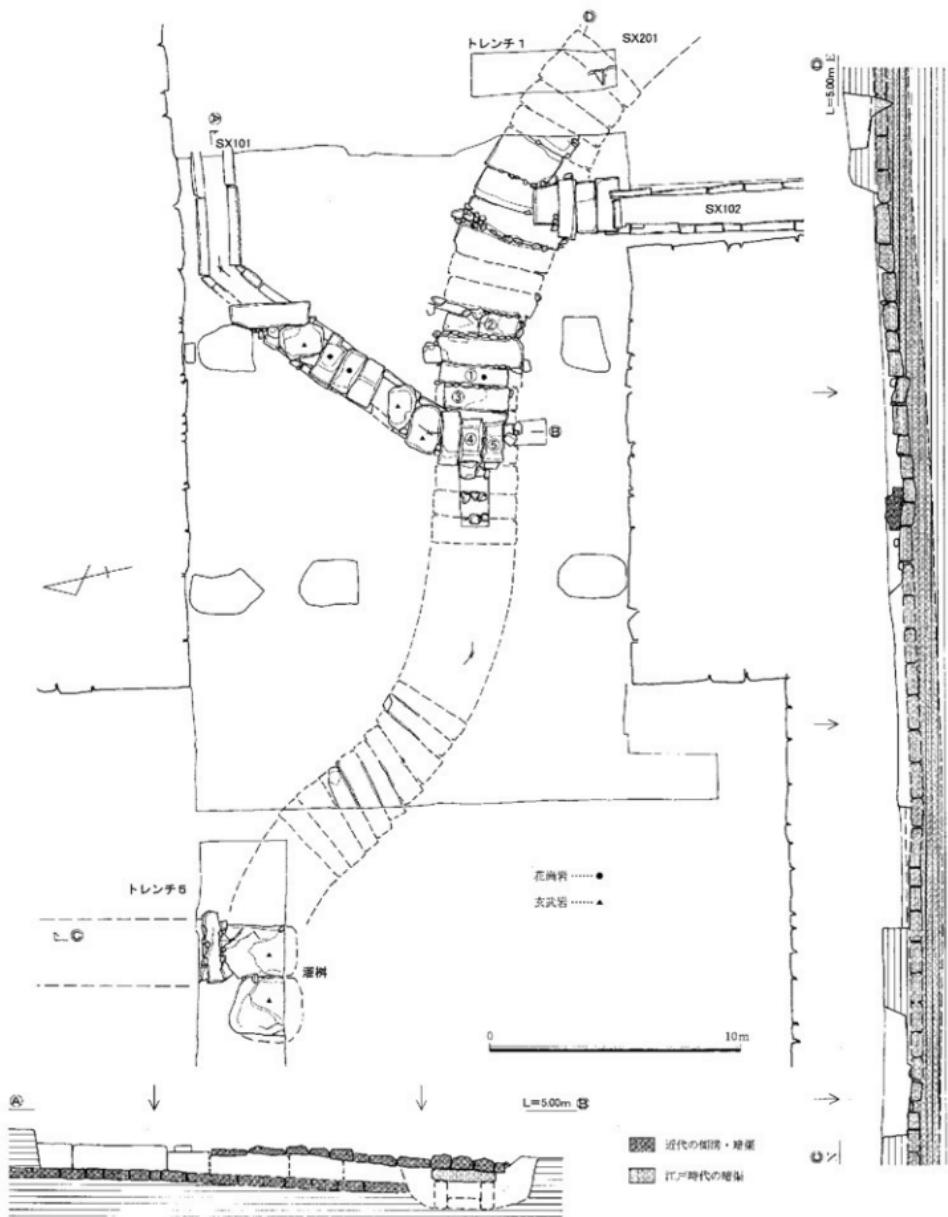


Fig. 23 石継側溝・暗渠実測図 (縮尺1/100)

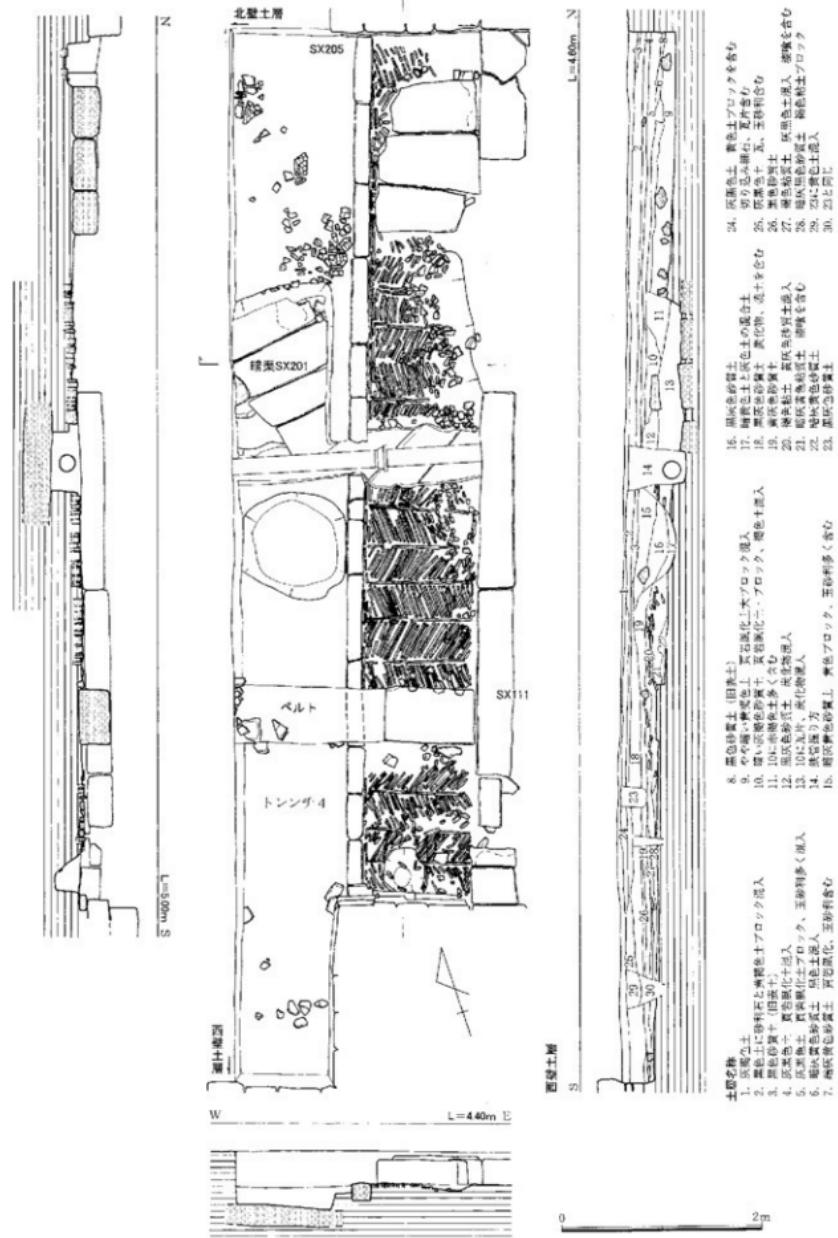


Fig.24 地覆石 SX205 東側瓦敷構造及びトレンチ 4 西壁土層実測図 (縮尺1/50)

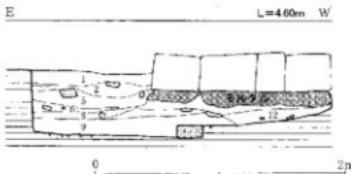


Fig.25 トレンチ4 北壁土層実測図 (縮尺1/40)

SX111の西側約1.1mの位置に南北方向の地覆石 SX205を検出した。地覆石上端の標高は3.8mを測る。

石材はすべて砂岩で、長さ44~87cm、幅約17cm、厚さ約16cmの柱状石を用いている。地覆石 SX111との間に、平瓦片を綾杉状に立てて埋め込んだ瓦敷きを発見した。

また、地覆石 SX205の西側前面のトレンチ4では平瓦片が散布していたが、一部は密に敷かれた状態であったものの綾杉状の瓦埋め込みであったのかについては確認出来なかった。

(6) 瓦敷遺構

江戸時代の遺構面は、門中央部分で標高4.1mを測る。表土は暗黄褐色粘質土である。門内においては敷石などはないが、門外の外枠形では、瓦敷き遺構が存在する。地覆石 SX111・SX205の間においては、6~13cmの大平瓦片を小口を上にして綾杉状に立てて埋め込んだ瓦敷きである。標高3.85mを測る。綾杉の幅は29~42cm、羽の長さは35~44cmを測る。瓦の隙間は、砂又は砂質土を充填している。北側は地覆石の付け替えや撤去などの搅乱を受け、遺存状態は良くない。また調査の関係上、瓦敷遺構の下部構造や地覆石 SX111の下部の瓦敷遺構存在有無について確認していない。雨落ち機能であるか否か、現段階では判断できない。

西側拡張区のトレンチ4では、標高3.67mを測る地点で敷瓦を検出したが、瓦を立てて埋め込んだ状態ではない。また、南側は瓦が散乱した状況にも見て取れる。

外枠形のトレンチ5においても、標高3.67mの高さから同じく瓦敷きを検出した。トレンチ4・5の敷瓦が本来立瓦であったかについては、上層の搅乱状況から定かではない。

調査区東側の拡張区トレンチ1では、標高4.38mの高さにおいて全面にトレンチ4・5検出同様の瓦敷きを検出したが、瓦片は全て伏せた状態であった。

内枠形の中央部に設定したトレンチ2では、標高4.6m~5.1mの高さにおいて綾杉状に平瓦片を立てて埋めた瓦敷きを検出したが、一部は搅乱のため瓦の散乱状況もみられる。内・外枠形には門を除いて、全面に立瓦が綾杉状に埋め込まれていたことが推測できる。

(7) 枠形門内の旧地表面

旧地表面の高さは、外枠形のトレンチ5で標高3.66m、トレンチ4では標高3.67m、SX205地覆石の標高4.05mを測る。また、東側の内枠形では、トレンチ1では標高4.13m、トレンチ2の標高4.6~5.1mを測る。Fig.36に示した様に、大手門の門内地表面は平坦ではなく、東西方向に約4°の傾斜をもっており、比高差は18cmを測る。トレンチ1とトレンチ2の比高差は27cmを測り、3°の勾配をもっている。門内を除き、内・外枠形には瓦敷きが認められる。路盤は、暗茶灰色粘質土である。

4. トレンチの調査

トレンチ1 (Fig.21・26) 石組暗渠の方向を確認するため設定した。搅乱層により、暗渠の一部が

破壊されている。瓦敷きは標高4.38mを測り、瓦の細片7~12cm大を敷いている。

トレンチ2 (Fig.27) 延宝7年~元禄元年に作製された「筑前国福岡城図」や、宝暦7年の「福岡城絵図」などの城絵図には、内枠形の綾類斜面に階段状の横断線が描かれていることから、その確認のために設定した。遺構面の北側の標高は5.1m、南側上位の標高は4.6mを測る。綾杉状に平瓦片を埋め込んだ瓦敷きを検出した。綾杉の幅は105cm、羽の長さは55~60cmである。ケーブル埋設壕から南側には瓦敷きを検出できなかったが、表層が流れたものと考えられる。

瓦敷きの間には、石垣に直交した方向に幅20cmを測る細長い空間が等間隔に3条存在する。その間隔は約1.05~2.7mである。土層断面でみるとかぎり幅20cmの細長い角柱石がはまっていた可能性がある。石柱の規模からみると、地覆石SX114の花崗岩石材の大きさが相当しており、階段状地覆石の石材が地覆石SX114に転用された可能性が高い。

トレンチ3 (Fig.16) 内枠形の北側石垣に沿って石組側溝が存在するが、この石垣から南北方向に屈折する東側石垣について石組側溝の有無を確認するため設定した。トレンチは幅1.5mの方形で、深さ1.5mまで掘削した。石垣の根石まで確認したが石組側溝は存在しなかった。

トレンチ4 (Fig.21・24・25) 門前面の綾杉状瓦敷きの存在を確認するために設定した。深さ40cmの暗黃灰色粘質土の上面において瓦の散乱状態を呈した面を確認した。瓦は平瓦の細片を主体とする。小口をもつ平瓦片は少ない。

擾乱壌底より、暗渠蓋石を検出した。標高3.56mを測る。蓋石を並べた方向は、トレンチ5の暗渠方向、門内検出の暗渠方向に極端なズレがあり、蛇行している可能性を示している。

トレンチ5 (Fig.21・28) 江戸時代の路盤及び、石組暗渠方向を確認するために設定した。暗渠溜井を検出したが、規模は不明。蓋石には、長さ1.3m以上の玄武岩板石を2枚用いている。

西側1石は、鉄管理設時に側辺を削り取られている。蓋石の上面及び、暗渠東側の標高3.66mの高さには、瓦細片を敷いた面である第8層が存在する。暗渠西側には、明確な瓦敷き面は存在しない。旧地表面は第4層の暗茶褐色土と考えられる。径30cmの穴が存在する。



トレンチ3 (西から)

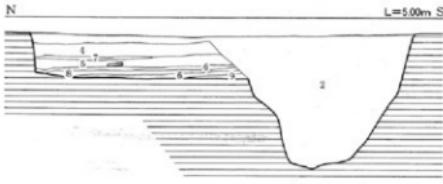


Fig.26 トレンチ1 東壁土層実測図 (縮尺1/40)



トレンチ1 東壁土層状態 (西から)

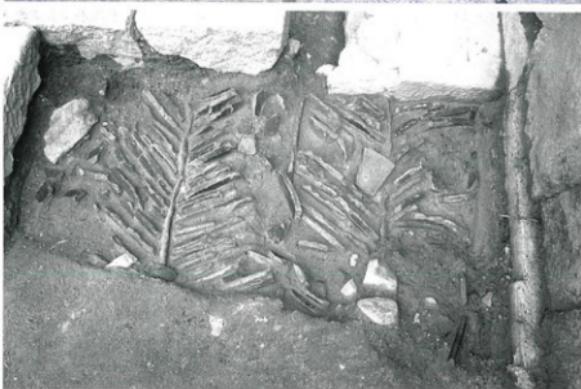
大手門前面瓦敷造構（西南から）



綾杉状の瓦敷造構①（東から）



綾杉状の瓦敷造構②（西から）



西壁土層

S

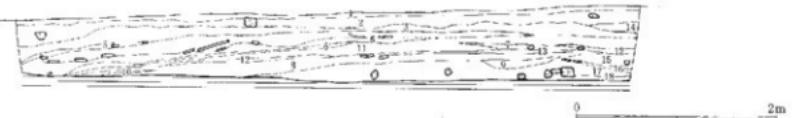
L=600m N



北壁土層

W

L=600m E



北壁土層



Fig. 27 トレンチ 2 平面・土層実測図 (縮尺1/50)

トレンチ2西壁土層状態①（東から）



トレンチ2西壁土層状態②（東から）



トレンチ2全景（北東から）



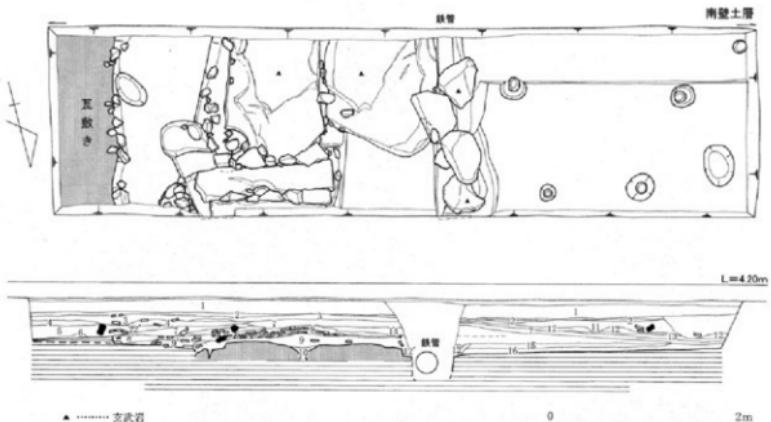
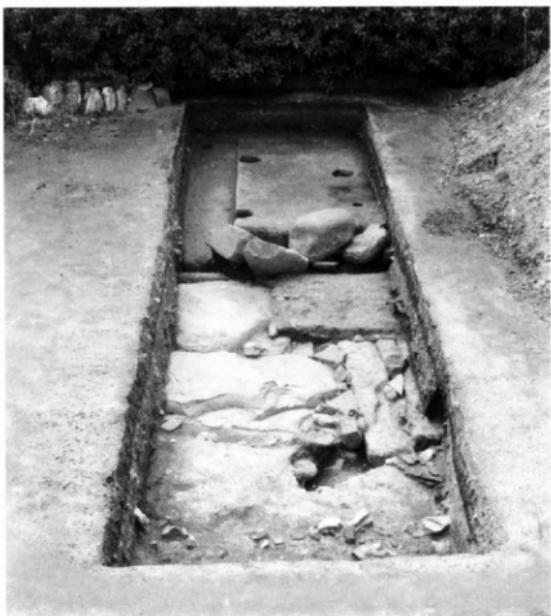


Fig. 28 トレンチ 5 平面・土層実測図（縮尺1/50）

トレンチ5土層名稱

1. 黒褐色土 レンガ片、石、雜、瓦片、風化貝殻を含む
2. 基黒灰色土 灰化物を含む 表土
3. 雜層
4. 風化褐色土 灰白色砂、灰化物を含む
5. 黑褐色白粘質土 貝岩灰化土
6. 雜褐色灰土
7. 基褐色粘土 瓦片、石、灰化物を含む
8. 基褐色粘土 灰化透徹
風化貝殻片を含む
9. 固褐色土に灰、褐色土風化
9. キナリ色土に灰、褐色粘質土 灰化物を含む
9. 黑色土に古い
10. 基沃白色粘質土灰化物を含む
11. 噴墨赤褐色土 石、レンガ片、瓦片、灰化物、灰化貝殻片、漆塊を含む
12. 黑灰褐色粘土 石炭片を含む
- 12'. 黑褐色粘土
13. 灰色砂質土
14. 噴墨褐色粘質土
15. 混みを帶びた基沃色粘質土
風化した貝岩片、灰化物を含む
16. 基沃色粘質土 灰化物を含む
17. 噴墨黑色粘質土
18. 噴墨黑色土 石、レンガ片を含む
しまりのない
19. 噴墨褐色土 石、レンガ片を含む
20. 基褐色粘土
21. 基褐色土 沢色を帯びる
瓦片、灰化物を含む
22. 沢色土と灰色土の混合土



トレンチ 5 全景（東から）

5. 大手門北側石垣天端の調査

「福岡城図」などの城絵図によれば、下の橋大手門は南北の石垣上に渡しかけた渡槽の形式に描かれ、また延宝7年(1679)～元禄元年(1688)の「筑前国福岡城図(福岡城之古圖)」などでは、橋門が南北側の石垣間に建てられているなど、城絵図において橋門の描かれ方に大まかに二種類あることから南北石垣の上部を発掘調査を行い、築城時の構造などについて確認することを目的とした。

地表面の標高は10.15mを測る。石垣の縁に沿ってコンクリート製の模擬土塀を巡らせており、遺構面は2面存在した。表土は黒色土で、厚さは10cmである。第2層は暗黄褐色土で、瓦片を含んでいる。

(1) 第1面の遺構

第1面は、暗黄褐色土で形成されている。標高9.85mを測る。地表面には瓦が各所に集積し、漆喰片が散布している。

① 建物跡

建物跡 SB02 (Fig.29) 石垣面の標高は10.27m、礎石の標高は10.15mを測る。石垣面より内側に約1.5m離れて礎石が存在する。礎石は長さ55～65cm、幅37～48cm、厚さ18～20cmを測る。

東側 SB02-1礎石は花崗岩の自然石を、西側 SB02-2礎石は凝灰岩の不整形角礎である。礎石間は芯々で、約2mを測る。西側端の礎石は失っている。その他には礎石は存在しないので、このSB02礎石は上の橋大手門写真にみられるように下屋遺構と考えられる。大手門内に存在する礎石とは柱礎石の柱筋が通っている。

② 瓦敷遺構

瓦敷遺構 SX215 (Fig.29) 調査区の東南側で検出した。半裁した平瓦を3列に20cm間隔で並べ、その外側に丸瓦片を埋め込んでいる。3条の瓦列の間は、褐色粘土を充填して硬化面を形成している。この瓦列の長さは約1.62m、幅は約80cmを測る。調査区の拡張によって瓦列の南側には、瓦と粘土を埋め込んだ硬化面が約3m続いていることが判明した。

(2) 第2面の遺構

第1面において一部礎石を検出したが、遺構面の整地層内に瓦が包含されていたことから、更に頁岩風化土を主体とした暗黄褐色土を約10cm掘り下げた。遺構面の標高は9.75m、石垣上面との比高差52cmを測る。

遺構面は頁岩風化土で、上面には瓦や漆喰の散布が見られる。石垣面より裏込石の幅は約1.1mを測る。裏込内には、軒丸瓦・軒平瓦等が含まれているが、いずれも築城当初の瓦と考えられる。出土した平瓦の規格は大きく、長さ35cmを測る。

① 集石遺構

調査区の西側石垣に沿って、集石遺構が2カ所存在する。

集石遺構 SX211 (Fig.29) 平面形は不整梢円形で、掘り方径は約1.15～150m、深さは不明である。覆土は茶褐色土であるが、しまりが無く、流入土と考えられる。土壌内には、拳大から人頭大に石が詰められているが、一部はコンクリートの堀基礎工事で原位置を動いている。礎石の抜き跡の可能性



北側石垣天端第1面全景（東から）



北側石垣天端第2面全景（東から）



北側石垣天端第1面礎石（北から）



北側石垣天端第2面裏込石（東から）



北側石垣天端第1面瓦敷き造構（東から）



北側石垣天端第2面集石造構（東から）

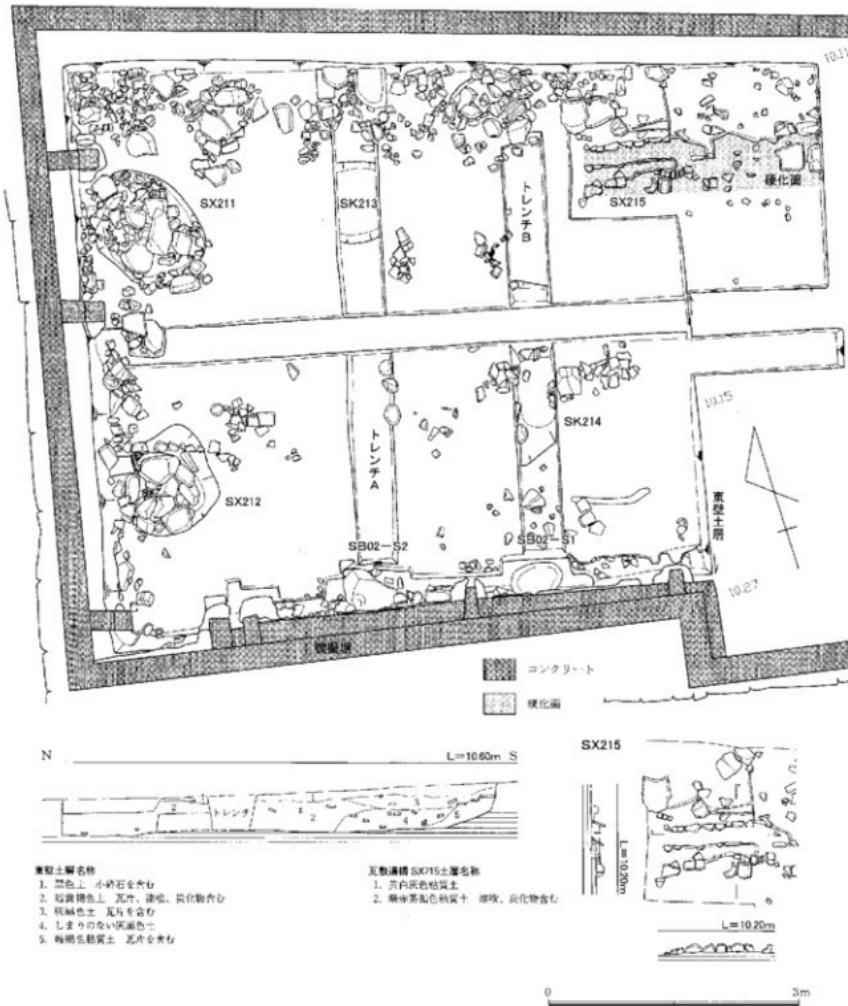


Fig.29 大手門北側石垣天端平面・東壁土層・瓦敷造構 SX215実測図（縮尺1/60）

が高い。集石内から瓦片が出土した。

集石造構 SX212 (Fig.29) 平面形は不整形で、掘り方様は約1.1~1.2mを測り、深さは不明である。腹土は茶褐色土であるが、しまりが無い。土壌内には、隼人から人頭大に石が詰められているが、一部はコンクリートの基礎工事で、原位置を動いている。礎石の抜き跡の可能性が高い。集石内から

瓦片が出土した。

② 上 壤

集石遺構を発見したため、礎石跡の存在を明確にするためにサブトレンチA・Bを設定した結果、トレンチAでは、上壌SK213を、トレンチBでは土壌SK214を検出した。いずれも礎は存在しない。

土壌 SK213 (Fig.29) 挖り方径95cm、深さ18cmを測り、平面形は不整円形である。覆土は、茶褐色土で、しまりがない。

土壌 SK214 (Fig.29) 挖り方径約2.1m、深さ60cmを測る。平面形状は不明。覆土は茶褐色土で、しまりがない。

6. 大手門南側石垣天端の調査

大手門北側石垣天端の調査同様に、「福岡城図」などの城絵図に描かれた櫓門が渡槽形式に描かれていることから櫓規模と形式を推定できる遺構を確認すること及び、城絵図では、築城期から幕末にかけて南側石垣の平面規模が拡大する傾向があることから、石垣継ぎ足し有無の確認を目的として実施した。

地表面の標高は10.25m、石垣上面の標高は9.98mを測る。コンクリート製の模擬土塀の基礎によって、裏込等の擾乱が著しい。遺構面は2面存在する。

(1) 第1面の遺構

遺構面の標高は、約9.9mを測る。表土の黒色土及び、第2層黄灰色粘質土を除去したところで、瓦や漆喰の散布がみられたので、任意の遺構面と見なした。

遺構面の標高9.9mを測り、石垣の上面との比高差は8cmである。遺構面は黄灰色土で、頁岩風化礫や瓦片が多く散布している。

礎石は確認できなかった。電柱の基礎掘り方SX121の内部に投げ込まれた最大径56cmを測る扁平な自然石や、南側壁に沿って長さ33~55cm大の割石を礎石とすることも考えられる。塀沿いの割石の一部はコンクリート塀の基礎工事で原位置を動いている。

調査区の南側に南北方向の列石がある。また、南壁に沿って東西方向の帯状に瓦と礫が散布している。

土壌は、すべて電柱の基礎支柱塀で、一部には電柱下部と支えの横木が遺存していた。

(2) 第2面の遺構

第1面に散布していた瓦片などの撤去及び、整地層の黄灰色土を約20cmを掘り下げたところ頁岩風化石を多く含んだ黄灰色土の面に達した。標高は、9.7mを測る。地表面には第1面同様に瓦や漆喰が散布しているが、少ない。調査区の三辺、則ち東・南・北の石垣天端にそって、石垣面から幅1.6~2.4mの裏込石を検出した。最も幅が広いところは、2.4mを測る。全体に東・南側の裏込が幅広い。裏込石の上面は、石垣内側に傾斜している。標高は9.8~8.2mを測る。南側裏込石の中間部分には、南北方向に長さ60cm大の角礫が土留め状に重ねられており、この石積みを境にして西側地山面(遺構面)は、急激に南方向に落ち込む。落ち込み部分の現存幅は、1.6mを、高低差は34cmを測るが、落ち込み内に多量の瓦と土砂が投げ込まれており、下部を確認できなかった。

大手門南側石垣は、平面形でみると北側に幅3.1mの出っ張りをもち、南側は東側面から約1.5mひいたところから南に約4.8m継ぎ足した様子が窺える。先述した「福岡城内図」などの江戸時代の絵図では、南側石垣は当初、長方形の細長い石垣を、次に南側に平槽が乗るほどの広い面積を確保するため石垣の継ぎ足しを行っていることが解っている。先程の第2面南側の地山面の落ち込みは、石垣継ぎ足しの際に石垣・裏込石を抜いた跡と考えることもできる。

大手門内側に突き出した石垣継ぎ足しの痕跡については、今回明らかにはできなかったが、突き出した石垣の裏込石の幅が狭いことや、確認のためのトレンチBでは、突き出した石垣線から南に約3.5m西側入隅と北面東西方向の石垣線に合致したところに礫群Aが存在することが把握できた。

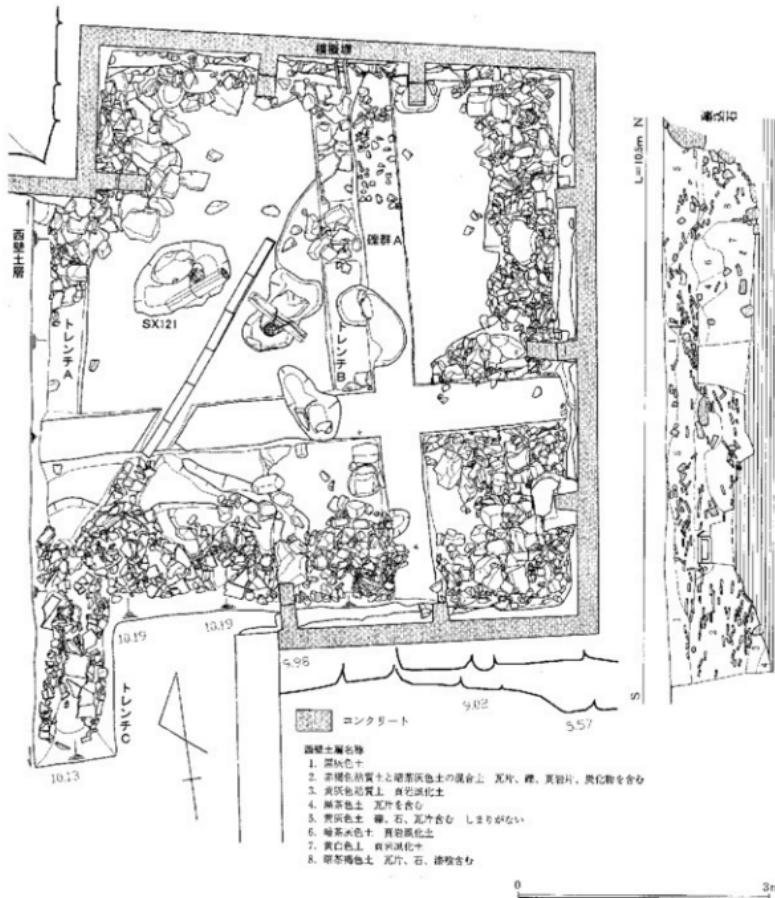


Fig. 30 大手門南側石垣天端平面・西壁土層尖削測図（縮尺1/60）



南側石垣天端第1面全景（西から）



南側石垣天端第2面全景（南西から）



南側遺構面の落ち込みと瓦堆積状態（西から）



南側石垣天端トレンチCの状態（西から）



トレンチA裏込石の状態（南から）



裏込内軒丸瓦出土状況（北から）

7. 出土遺物



Fig. 31 上の橋大手門跡出土軒瓦（縮尺1/4）

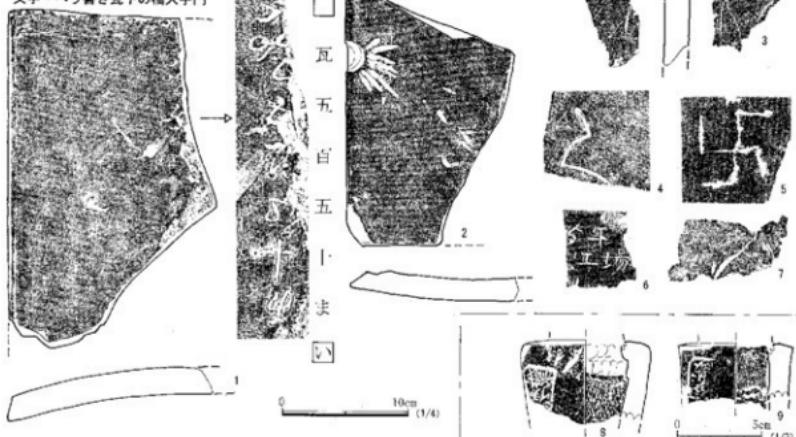


Fig. 32 下の橋大手門出土軒平瓦 (縮尺1/4)



Fig. 33 下の橋大手門出土軒瓦（縮尺1/4）

文字・ヘラ書き瓦下の様大手門



瓦師銘 (1/4)



礎石・石垣・埴塀の墨石の刻印



瓦の記号 (1/4)

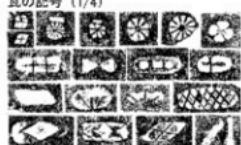
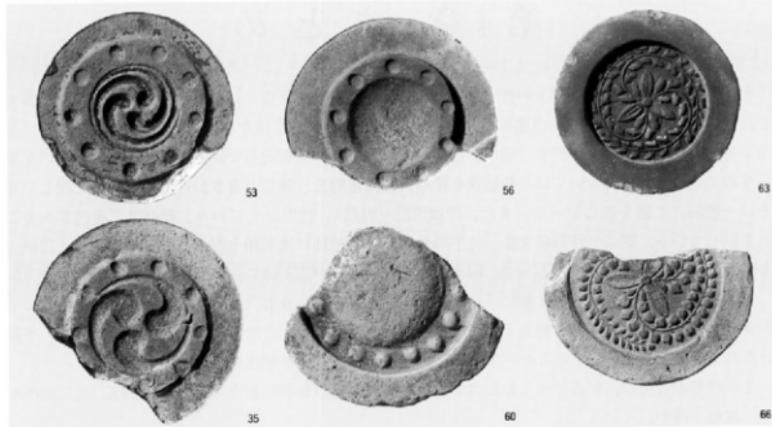


Fig. 34 大手門出土記念銘刻印瓦、文字瓦及び、石垣刻印拓影 (縮尺1/4・1/3)

下の橋大手門出土軒丸瓦



下の橋大手門南側石垣天端出土軒瓦



1 伊右衛門 13 惣兵衛 19 基兵衛 25 基左衛門 31 長左衛門 34 彦兵衛 37 彥兵衛



41 基左衛門力 43 金右衛門 49 左衛門力 55 弥兵衛 56 一部左衛門力 59 吉左衛門 64 市右衛門 69 新九郎

第4章 まとめ

大手門復元の手掛かりは、上の橋大手門の写真や城絵図にすぎない。絵図では、いずれも上の橋大手門と下の橋大手門を相似形の建物として、また二層櫓門として描かれている。文献資料では、「繪垣文書」に上・下の橋大手門を「櫓門」と記している。この文書史料では、建物修理、建替えの記事を集めているが、櫓については一階建物を平櫓、三階建物を三階櫓と書き分けており、櫓と記した場合は一般的に二層を表している。また、門は平門（垣門）、櫓門としており、櫓門は二層門であることを示している。更に「伊丹家文書」に下の橋櫓門の二階櫓に道具類を収納していることと入口が二カ所「戸前ニツ」との記載があって、御家預り（管理者）が別々にいることを書き記している。

上の橋櫓門の写真では、櫓北側に下屋が見えている。また、表御門の写真には、櫓の北・南側に下屋が写っていることから下の橋大手門が二層櫓門であり、且つ北と南側にそれぞれ下屋（入口）が設けられていたことを推測することができる。以下に発掘調査の結果を述べる。

1. 桁形の規模は、別表に示したとおり、上の橋大手門の桁形が大きく造られており、正に表門の風格を持つ。
 2. 門の礎石配置及び、規模は梁間4.8m、桁行7.25mを測り、建物跡平面積は34.8m²である。
建物平面形規模、構造は同形であることが判明した。
 3. 江戸時代と考えられる路盤の標高は、門内は標高3.95mではなく同レベルである。外桁形は、下の橋大手門が約3.64m、上の橋大手門が約3.7mを測る。
 4. 門両側の石垣高は、下の橋大手門が6.56m、上の橋大手門が6.05mを測る。下の橋大手門が約50cm高い。
 5. 桁形内の路盤の整備であるが、上の橋大手門は門内及び、外桁形は、玉石敷きで、内桁形には瓦片を敷き詰めている。文書史料に「瓦坂」の記録がある。下の橋大手門は、内桁形には綾杉状の瓦立の瓦敷きを行い、柱状石の棟を階段状に設置している。外桁形は瓦敷きであるが、門表の樋石と闕石との間には、綾杉状の瓦立の瓦敷きが存在する。雨落ち機能なのか検討を要する。
 6. 東御門・表御門には冠木を支えるために石垣上位に欠き込みがみられるが、下の橋大手門の両側の石垣には、冠木の落とし込み痕跡が見られない。
 7. 上の橋大手門北側石垣は、石垣下部に番付のペイントが認められる。石垣の組成も不規則で、隙間に玉石を嵌め込むなど、石垣大修理の痕跡がある。北側石垣奥隣に欠き込みがみられる。
 8. 石組暗渠は、設置時期が不明である。下の橋・上の橋大手門桁形共に同様な構造で設置されているが、修理が多く行われている。また、現代暗渠の配位置状況や明治以降と考えられる石組側溝の終末を江戸時代の暗渠につないでであることから、暗渠の位置を示す記録が最近まで残っていた可能性がある。
 9. 漂水は上水として利用されているが、明暦2年（1656）の「慶長御城廻絵図」には、城門より城下北側の浜まで木橋が渡されている。上水から下水への意識の違いがみられ、石組暗渠は少なくとも明暦2年以前と考えられる。
 10. 「正保城絵図」などには、渡櫓形式の建物が描かれている。人手門北側石垣天端では、第2面の集石遺構SX211・212は、礎石の抜き跡と考えられる。また瓦を3条に立て並べ、粘土を貼った硬化面のSX215は櫓入口を推測させるもので、渡櫓の可能性は高い。
- 以上、簡単であるが、発掘調査報告のまとめとする。

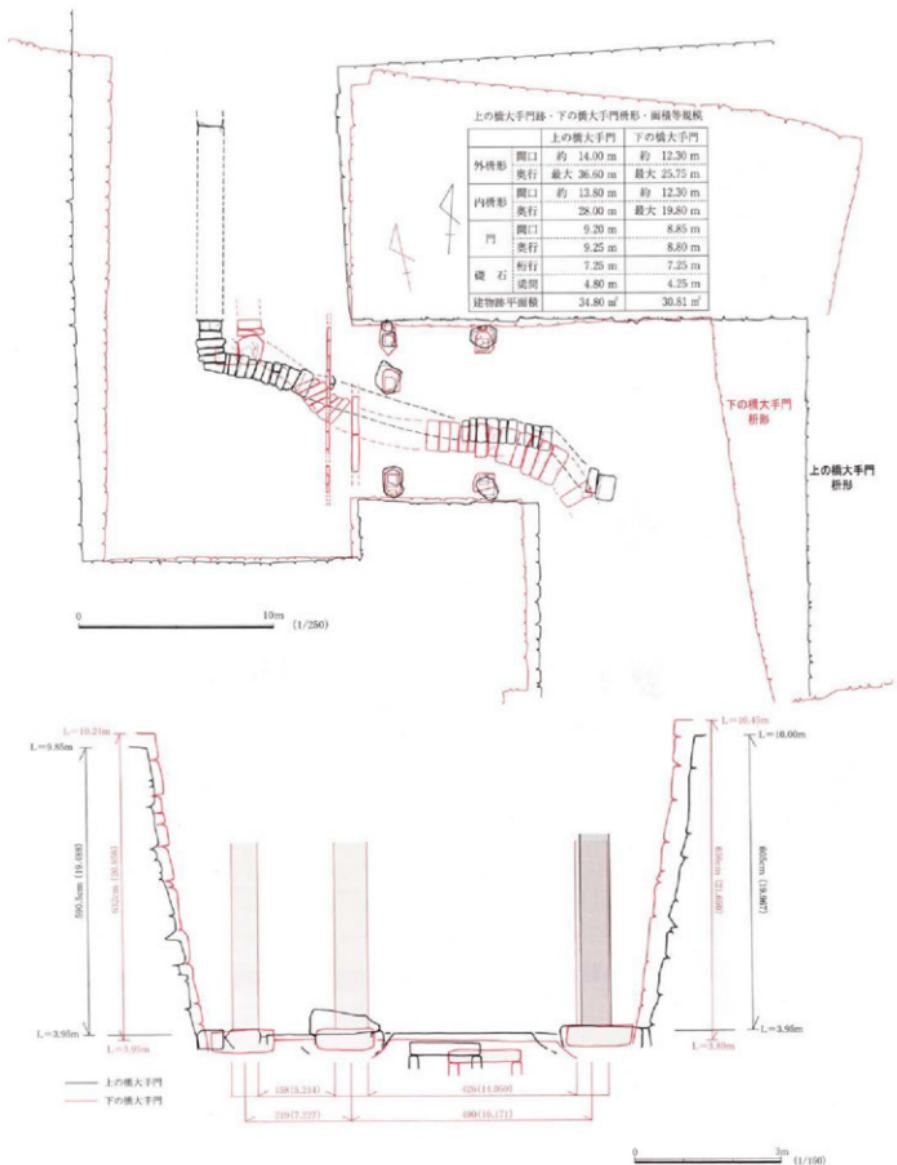


Fig. 35 上の橋・下の橋大手門の平面・断面規模比較図（縮尺1/250・1/150）

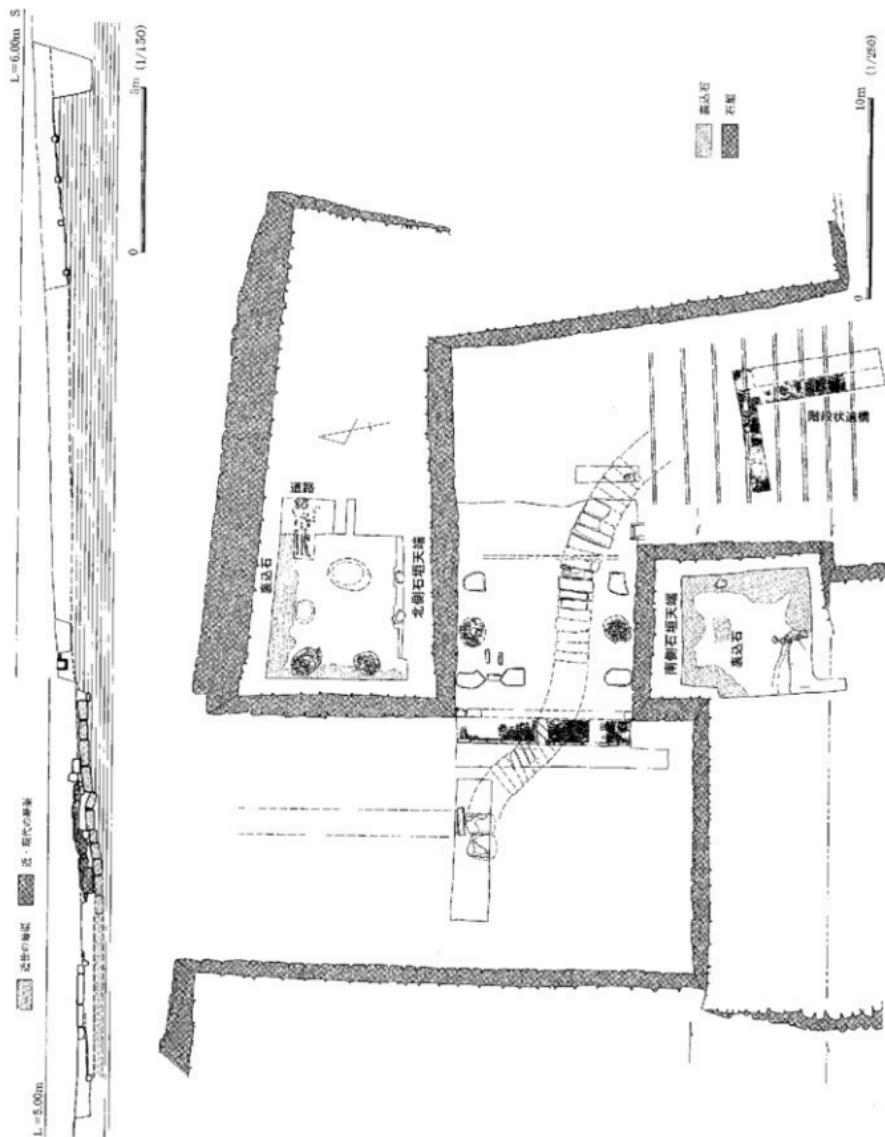


Fig. 36 下の橋大手門江戸時代地表面及び遺構推定復元図（縮尺1/150・1/250）

福岡城跡大手門

—第48次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第772集

2003年(平成15年)3月31日発行

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 城島印刷有限会社

